東京文理科大學教授

神保格 著

小學國語讀本朗讀法（卷九）

尋五前期用

武知訓

東京文理科大學教授

神保格著

小學國語讀本朗讀法（卷九）

尋五前期用

FC77
31

49.7.31

989207

はしがき

本書編述の趣旨も卷一以下と同じである。

馬淵冷佑氏の有益な助言を得たこと、深い感謝の意を表すことも常に同じである。

昭和十二年四月

著者

小學國語讀本朗讀法（尋五前期用）目次

はじがき

序　說……一

ショオガク　コクゴドクホン　マキノ　ク（本文及び解說）

ダイ　イチ』シガツ』……五

ダイ　ニ』ハルノ　ヨ』……九

ダイ　サン』ヒコオキノ　ハツメモ』……一一

ダイ　シ』ハチマン　タロオ』……一三

ガイダンス ……三
ガイダンス ……三
ガイダンス ……三

小學國語讀本朗讀法（卷九）

〔尋五前期用〕

目次

ダイ ニジュウ シチ　タチバナ チュウサ …… 一五
ダイ ニジュウ ハチ　コクゴノ チカラ …… 一四

序說

本書の記述說明の體裁は前卷と殆ど同じである。

〔甲〕は發音とアクセントを記すが、本卷においては此の二つを混合して述べた。文字の讀み方は文部省の「編纂趣意書」に據つたが、同書に示す讀方には現代東京語の慣習と異るものがある。

〔乙〕は斷續・速度・抑揚調子を混合して述べること前卷と同じである。

色々の符號の說明は前卷の序說に擧げた、それを參照されたい。

ショオガク　コクゴドクホン　マキノ　ク

ジンジョオカヨオ　モンブショオ

一頁

ダイ　イチ　シガツ

シガツト　イエバ　ハルワ　モオ　ナカバデ　アル　ツキノ　ハジメワ
マダ　サムクテ　ツメタイ　アメノ　フリシキル　コトモ　アルガ　ソノ
アイダニモ　ヤナギノ　メノ　ミドリガ　ヒマシニ　フトリ　ハタケヤ
ミチバタノ　ワカクサガ　メニミエテ　ノビテ　クル　モモノ　ハナワ
サンガツノ　スエゴロ　サキダシテ　コノ　ツキノ　ハジメニ　ソロソロ
ハナザカリオ　ミセル

二頁

マタレル　モノワ　サクラデ　アル　ハヤイ　トシニワ　サンガツノ　スエカ
シガツノ　ゴク　ハジメニ　ツボミノ　ホコロビル　コトガ　アルガ　ソオ
ユウ　トシニワ　キセツハズレノ　ユキガ　フつタリ　シテ　セつカクノ

三頁

ハナオ　ダイナシニ　スル』　ソオデ　ナクテモ」　ニサンブ　サキカケタ
トコロエ　ヨク　イジワルノ　アメガ　フリソソグ」　アメガ　ヤンデ
ウレシヤト　オモウ　ヤハンカラ　トホオモ　ナイ　ミナミカゼガ
フキダシテ」　ハナオ　イタメツケル』　ハナノ　サク　コロワ　イツモ
コオシテ　キオ　モム　コトガ　オオイ』
ソレニ　シテモ」　マイネン　ハナワ　カナラズ　サク　モノデ　アル」
アタタカナ　ハルノ　ヒガ　イチニチカ　フツカモ　ツズクト　ミレバ」
サクラト　ユウ　サクラワ　ホトンド　ノコラズ　サキツクシテ」　ノモ
ハナ」　ヤマモ　ハナ』　ニワモ　ノキバモ　カワバタノ　ツツミモ
ガつコオノ　ウンドオジョオモ　ジンジャ　ジインノ　ケエダイモ」
イチジニ　ハナデ　ウズマル』　コオ　ナつテワ　トテモ　ウチニ

四頁

ジつトシテ　イラレナイ』　オトコモ　オンナモ　ロオジンモ　コドモモ」
アリト　アラユル　ニンゲンワ」　ハナオ　タズネ　ハナニ　ウカレテ　デテ
クル」　ヒトバカリデワ　ナイ」　コトリモ　チョオモ　ハチモ　ソオデデ」
イチネンニ　ニドト　ナイ　コノ　ハナザカリオ」　ヒトトキデモ　ナガク
タノシモオト　スルカノ　ヨオニ　サイワイニ　シテ　ヒワ　ナガイ』　アサ　カナリ　ハヤク　オキタ
ツモリデモ」　モオ　タイヨオワ　ウラウラト　ノボつテ　イル』　ヒバリノ
ウタガ　カスンダ　ソラニ　ノドカニ　キカレル」　イチニチオ
アソビクラシ　トオク　イリアイノ　カネノ　ヒビキオ　キイテモ」　ナオ
チョオテエノ　サクラワ　ユウヒニ　エエジテ　ハナヤカニ　サキツズイテ
イル』

五頁

ハナガ・チつテ　ハジメテ　ヒトノ　ココロガ　オチツク』ハルノ
ノドケサガ　ホントオニ　アジワワレル』ノズエノ　スミレ　タンポポ
キンポオゲ」ハタケ　イチメンニ　サク　ナノハナ」ソオシタ　モノニ
シミジミト　ハルノ　コオフクオ　カンズル』」
シカシ　シゼンワ　シバラクモ　トドマつテ　イナイ』キギノ　コズエワ
カタハシカラ　メオ　フキダス』ケヤキノ　タイボクガ　タンカつショクニ
ボつト　オオゾラオ　イロドル』カエデノ　メノ　クレナイガ　ユメノ
ヨオニ　ヒロガル』キニ　タンコオニ　センリョクニ　コズエコズエガ
ケムル　ヨオニ　ミエ」ヤガテ　ソレガ　ホボ　イチヨオノ　ワカミドリノ
イロニ　ハエダス　コロワ」モオ　ヤエザクラモ　チリハテテ」ユク
ハルオ　オシム　ココロガ　ソロソロ　ムネニ　セマつテ　クル』

〔甲〕

ワカクサ、ワカグサとはいはない。メニミエテ、別々にはメニ　ミエテである。此處は「著しく」といふ様な意に使つてある。その時はいつも續けてメニミエテといふ。ウラウラト、又はウラウラトともいふ。エエジテ「映」、又は平板式。サキツズイテ、又はサキツズイテ。キニ「黄に」、アクセント必ずしも確定してゐない。キニといふ人もある様である。『淺緑』アクセント不確。センリョク、又は平板である。『目に見えて』を稍強める。『此の月の初に』の次は切らない方がよい。『四月のごく初に』の次も切らない方がよい。『さうでなくても』の次は切つた方がよい。（二頁）六行『必ず』を稍強める。

〔乙〕

其の他切り方抑揚等特に著しく變化を附けるべき處は無い。休止をやゝ長く、全體をゆつくり言ふことが此の課の意味と心持を表現するのに適當であらう。

ダイ　ニ』ハルノ　ヨ』

アタタカイ　バンダ」ヨイカラ　アカチャンガ　スヤスヤト　ネムつテ

イル』

六頁

トオイ キテキ シメヤカニ ゲタノ オト ドコカデ ドつト
ワライゴエ』
アタタカイ ソオシテ ナニカ アタリガ ウキウキト ゾヨメク
バンダ』

七頁

アネモネヤ チュウリつプノ ツボミガ グングン フクラミソオナ
バンダ』

〔甲〕アネモネ、これが原語（英語 anemone）に近いアクセントである。チュウリつプ、原語（英語 tulip）に近くいへば、チュウリつプである。日本語で此の型でいふ人もあるが、チュウリつプの型でいふ人の方が多い様に思はれる。

〔乙〕此の課もゆつくり言ひ、殊に切り處、休止の處をやゝ長く切るのがよい。

八頁

ダイ サン』ヒコオキノ ハツメエ

ソラ トブ トリオ ミテ ジブンモ アアユウ フウニ トンデ
ミタイト オモイ イロイロ クフウオ コラシタ ヒトワ カナリ
フルクカラ アつタ ヨオデス ワガクニデモ イマカラ ヒャク
スウジュウネン マエ オカヤマノ コオキチト ユウ ヒョオグシガ
ハトノ カラダオ ケンキュウシテ オオキナ ツバサオ コシラエ
ソレオ アヤツリナガラ ヤネカラ トンデ ヒトビトオ オドロカシタト
ユウ ハナシガ アリマス』

ドイツノ リリエンタアルモ オナジ ヨオニ トリカラ オモイツイテ
ツバサニ ニタ モノオ ツクリマシタ ソレオ カラダニ ツケテ

九頁

オカノ　ウエカラ　ヒトオモイニ　トンデ　ミルト」イガイニ　ンマク
クウチュウオ　カつソオスル　コトガ　デキマシタ』ソレイライ　カレワ
マスマス　ケンキュウオ　カサネ」カつソオキオ　カイリョオシテ　ソノ
ソオジュウニ　ネつチュウシマシタガ」アルヒ　トつプウニ　アオラレテ
ジュウオ　ウシナイ」ソラカラ　オチテ　シンデ　シマイマシタ』コレワ
ワガ　メエジ　ニジュウ　クネン　ハチガツノ　コトデシタ『―』
オナジ　コロ」アメリカ　ガつシュウコクニ　ラングレエト　ユウ　ヒトガ
イマシタ』コレモ　コドモノ　トキカラ　トリオ　ミテワ　シキリニ
カンガエテ　イマシタガ」オトナニ　ナルト　ネつシンニ　ヒコオキノ
ケンキュウオ　ハジメマシタ』
カレワ　ヒコオキノ　モケエオ　ツギカラ　ツギエト　ツクつテ

十頁

ケンキュウオ　ススメマシタ』ドオユウ　ドオリョクオ　ツケルカニ
ツイテモ　イロイロ　カンガエマシタガ」トオトオ　チイサイ
ジョオキカンオ　ツクつテ　トリツケル　コトニ　セエコオ　シマシタ』
カレノ　クシンニ　ナつタ　モケエヒコオキワ」ミゴト　イつキニ
センメエトルチカクモ　トンデ」ヒトビトオ　アつト　イワセマシタ』
ソレワ　チョオド　リリエンタアルガ　シヌ　サンカゲツホド　マエノ
コトデシタ』』
モケエヒコオキガ　トブノデスカラ」ソノ　オオキイ　モノオ　ツクリサエ
スレバ　キつト　ニンゲンモ　ノつテ　トベルニ　チガイ　アリマセン』
ラングレエワ　ソノゴ　イつショオケンメエニ　ナつテ　ジツブツオ
ツクリマシタガ」サテ　イヨイヨ　シケンオ　シテ　ミルト　ンマク

十一頁

イキマセン』ニカイ　ヤつテ　ニカイトモ　コワレテ　シマイマシタ』
モケエヒコオキワ　リつパニ　トンダノニ』ジツブツワ　トオトオ
シっパイニ　オワリマシタ』
オナジ　アメリカ　ガつシュウコクニ』ライトト　ユウ　キョオダイガ
イマシタ』アニオ　ウィルバア』オトオトオ　オオビルト　イイマシタガ』
フタリワ　ショオガつコオニ　カヨウ　コロカラ　ナニヨリモ　キカイガ
ダイスキデシタ』
リリエンタアルガ　シンダ　コトモ　ラングレエガ　モケエヒコオキオ
トバセタ　コトモ』カレラワ　セケンノ　ヒトビト　イジョオニ　ソノ
キジオ　ネつシンニ　ヨミマシタ』ト　ユウノワ』カレラモ　マタ
ヒコオキオ　ツクル　コトガ　ネンライノ　ノゾミデ　アつタカラデス』

十二頁

十三頁

アニワ　ナンデモ　リクツデ　カンガエル　ホオデシタガ』オトオトワ
リクツヨリモ　ジっサイノ　モノオ　ツクルノガ　トクイデシタ』
メエジ　サンジュウ　サンネンノ　ナツ』フタリワ　キタカロライナシュウノ
スナヤマノ　アル　トコロオ　ミタテテ　ソコデ　カっソオキノ　ジっケンオ
シマシタ』イロイロノ　カタチノ　カっソオキオ　ツクっテ　シケンオ　シテ
イル　ウチ』ヨクネンノ　ナツ　ヒャクメエトルイジョオモ　クウチュウオ
カっソオスル　コトガ　デキマシタ』
ツギニ　ハツドオキニ　ツイテ　ケンキュウシマシタ』ガソリン
ハツドオキガ　ヨイトワ　オモイマシタガ』マダ　ソノ　コロワ　カルクテ
ツヨイ　チカラノ　デル　モノガ　アリマセンデシタ』フタリワ　クシンニ
クシンオ　カサネタ　アゲク』ドオヤラ　テキトオナ　モノオ　ツクル

十四頁

コトニ　セエコオシマシタ』　ソレカラ　プロペラニ　ツイテモ　イロイロト
クフウオ　コラシマシタ』
メエジ　サンジュウ　ロクネン　ジュウニガツ　ジュウヨっカ　キョオコソ
フタリノ　クシンニ　ナル　ヒコオキオ　トバセヨオト　ユウノデス』
ジョオテンキデ　カゼガ　チっトモ　アリマセンノデ　スナヤマノ　ウエエ
キオ　ハコンデ　シャメンオ　スベラセナガラ　トバセル　コトニ
シマシタ』
アニノ　ウィルバアガ　サイショニ　ノリマシタ』　プロペラガ
カイテンスルト　キワ　イキオイヨク　シャメンオ　スベっテ
クダリマシタ』　ソオシテ　ジュウスウメエトルモ　カっソオシタ　コロ
キワ　ハタシテ　ジメンオ　ハナレマシタ』

十五頁

シカシ　ニサンメエトル　クウチュウニ　アガっタト　オモウト　キュウニ
フラフラト　シテ　ヒコオキワ　チジョオニ　オチテ　シマイマシタ』
ソノタメ　キタイワ　イクブン　ハソンシマシタ』　コオシテ　コノヒノ
シケンワ　シっパイニ　オワリマシタ』―』
ソレカラ　フツカカン　フタリワ　キノ　シュウゼンニ
イつショオケンメエデシタ』
ミつカメノ　ジュウニガツ　ジュウシチニチガ　キマシタ』　アサカラ
ダイブ(ン)　カゼガ　ハゲシイノデ　シバラク　ミアワセテ　イマシタガ
ヤガテ　イクブン　シズマっタ　コロ　フタリワ　キオ　ヒキダシマシタ』
キョオワ　ヘエチデモ　トベルダロオト　オモワレマシタ』
コンドワ　オトオトノ　オオビルガ　ノリマシタ』　キワ　カゼニ　ムカっテ

十六頁

ユルユルト　カつソオ　シハジメ」　ジュウスウメエトル　ハシつテ　フワリト
クウチュウニ　ウカビマシタ』
カゼガ　ツヨイノデ　キワ　ウエエ　シタエ　ドオヨオシマス」　ソレデモ
サンジュウ　ロクメエトル　バカリオ　ミゴトニ　ノリキつテ　チジョオニ
オリマシタ』　タつタ　サンジュウ　ロクメエトル」　ジカンニ　シテ　ワズカ
ジュウニビョオデシタガ」　シカシ　ドオリョクニ　ヨル　ヒコオキガ
ニンゲンオ　ノセテ　クウチュウオ　ヒコオスル　コトニ
セエコオシタノワ」　コレガ　ハジメテダト　イワレテ　イマス』
ソノヒワ　ナオ　ニカイ　サンカイト　シケンオ　クリカエシマシタ」
ソオシテ」　ソノツド　セエセキガ　アガつテ　イク　ヨオデシタ」
シカイメニ　アニ　ウィルバアガ　ノつタ　トキワ　ヒジョオニ

十七頁

チョオシヨク　トンデ　ゴジュウクビョオ　ニヒャク　ロクジュウメエトルト
ユウ　コオセエセキオ　オサメマシタ』
ソレイライ　コンニチマデ　ワズカ　サンジュウ　イクネンオ　ヘタニ
スギマセンガ」　チュウガエリヤ　コノハオトシノ　ミョオギニ　セケンガ
オドロキノ　メオ　ミハつタノモ　モオ　ムカシノ　コト」　イマデワ
タイリクト　イワズ　タイヨオト　イワズ」　ヒコオキガ　ジユウジザイニ
クウチュウオ　トンデ」　リョコオニ　ユソオニ　グンジニ　スバラシイ
カツヤクオ　ミセテ　イマス」　モチロン　ソノアイダ　ヒコオキワ　ヒビニ
カイリョオセラレ」　ヒコオギジュツモ　マタ　ヒジョオナ　シンボオ
トゲタノデスガ」　ソレニ　シテモ」　ソノ　サイショト　イエバ
ライトキョオダイノ　クシンニ　ナつタ　ジュウニビョオ　ナイシ

ゴジュウクビョオノ　ヒコオデ　コレガ　ジツニ　ヒコオキニ　オケル
ジンルイ　サイショノ　カガヤカシイ　セエコオキロクデ　アつタノデス』

〔甲〕

『百數十年前』の『前』はマエと讀むのを本體として「ゼン」と讀んでもよいことになつてゐる。この時アクセントはヒゃク　スウジュウネンゼンである。オカヤマ(平)、又はオカヤマ。リリエンタアル、これが原語（ドイツ語 Lilienthal）のアクセントに近い。日本語のアクセントとしてはまだ慣習が出來てゐないから、原語に近いものを採用する。『あふられて』はアオラレテといふ。アフ……の様にいはない。ラングレエ、これが原語（英語 Langley）のアクセントに近い。且グは原語ngの音に近いので之を採る。ネつシンニ、又はネっシンニ。『千米近く』『近』のヂを「濁音」にいふ時アクセントはセンメエトルジカクといふ。アつト、又はアっト。サンカゲツ、又はサンガゲツといふ人もあるが、此處は採らない。

ウィルバア（原語は英語 Wilbur）、オオビル（原語は英語 Orville）、以上がそれぞれ原語に近い讀み方である。『といふのは』の『と』は常

に上の語に附けていふので、「ト」だけではアクセントの型は固定してゐない。ネンライノ、又はネンライノといふ人もある。

カロライナ、一つ離していふ時はこれが原語（英語 Carolina）の讀み方に近い。

ガソリン、平板式。これが日本語での慣習として固定してゐる。原語（英語 Gasoline, Gasolene）に近くいへば、ギャソリーンであらうが、こんな發音は試みないでよい。プロペラ、これが原語（英語 propeller）に近い。日本語でプロペラの様にいふ人が無いでもないが、まだその慣習が固定しないから原語に近い方を採る。

トバセヨオト（原讀本十三頁六行）、又はトバセヨオトともいふ。シャメン、又はシャメンといふ人もある。

『勢よく』常に續けてイキオイヨクの型でいふ。別々にはイキオイ　ヨクである。

フラフラト、又はフラフラト。『平地』一つ離してはヘエチ(平)、又はヘエチ、『でも』の附く形は前者(平板)がヘエチデモ、後者がヘエチデモ。ウエエ　シタエ、「上へ下へ」、又はウエエ　シタエ。ノリキつテ、キの母音無聲化する時はノリキつテである。

ジカンニ「時間に」、又はジカンニ。ソノカン、ソノアイダといふ時、アイダは平板式

十八頁

である。

［乙］ 此の課も切り方休止を適當に附け、全體をやゝゆつくりと言ふのがよい。抑揚調子については特に著しい變化を附けるべき處は無い。

「讀點」(、)があつても切らない方がよいと思はれる例は(　)此の符號の處)

(八頁二行) それを體に着けて、岡の上から……

(九頁九行) 附けるかについても、いろ〳〵……

(十一頁末行) 作ることが、年來の……

(十三頁九行) ウィルバーが、最初に……

(十五頁六行) 十數米走つて、ふはりと……

等である。

ダイ　シ』　ハチマン　タロオ』

ハチマン　タロオ　ヨシイエ　アルヒ　アベノ　ムネトオオ　メシツレテ

十九頁

ヒロキ　ノオ　スギユキシニ　キツネ　イつピキ　メノマエニ

ハシリイデタリ』　ヨシイエ　セナカノ　ウツボヨリ　カリマタノ　ヤオ

ヌキテ　ユミニ　ツガエ　キツネオ　オイカケシガ　イコロサンモ

フビント　オモイ　サユウノ　ミミノ　アイダオ　ネライテ　ヒョオト

イル』　ヤワ　アヤマタズ　キツネノ　ズジョオオ　スレスレニ　カスメテ

ハナサキナル　ツチニ　ブスト　ツキタチ　キツネワ　ソノ　バニ

タオレタリ』』

ムネトオ　ンマヨリ　オリテ　キツネオ　ヒキアゲ

ヤワ　アタラヌニ　キツネワ　シニテ　モオセバ　ヨシイエ

オドロキテ　タオレタルナリ』　ステオカバ　マモナク　イキカエルベシ>ト

ユウ』

二十頁

ムネトオ　スナワチ　ヤオ　ヌキトリテ　サシイダセバ　ヨシイエ
クルリト　セオ　ムケテ　ウツボニ　ササセケリ』　ムネトオワ　モト
ゾクグンノ　タイショオニテ　チカゴロ　クダリシ　モノナレバ　ヨシイエノ
ケライドモ　コレオ　ミテ　カノ　スルドキ　ヤオ　ササシメ　タモオ　コトヨ』
アヤウキ　コトカナ』
モシ　ムネトオニ　アクシン　アラバ>ト　テニ　アセオ　ニギリケリ』

［甲］ネライテ(乎)、又ネライテともいふ。ソノ　バニ、又は續けてソノバニといふ。スルドキ、又はスルドキといふ人もある。

［乙］此の課の様な文語文は口語文の抑揚調子と同様に讀んでよい。『死にて候』等の『候』は極く輕く(弱く)言ふべきである。口語の「死にました」「死んでゐます」等と同様の抑揚でよい。『もし宗任に惡心あらば』の邊は特に聲をひそめて言ふと「怖ろしい」心持が表現されるであらう。

二十一頁

ダイ　ゴ』　マツシタ　ゼンニ』

ホオジョオ　トキヨリノ　ハハ　マツシタ　ゼンニ　アルヒ　トキヨリオ
ショオダイ　セントテ　ショオジノ　ヤブレオ　テズカラ　ツクロイ
イタリ』』
ゼンニノ　アニ　ヨシカゲ　コレオ　ミテ　カカル　コトワ　メシツカイニ
メエジタマエ』　ミズカラ　テオ　クダシタモオニ　オヨバザルベシ>ト
イイシニ　ミズカラ　ナシウル　コトワ　ヒトデオ　カルマデモ　ナシト
オモエバ<トテ　ナオ　マエノ　ゴトク　オボツカナキ　テツキニテ
ヒトコマズツ　ハリイタリ』』
ヨシカゲ　カサネテ　サラバ　コトゴトク　ハリカエタマエ』　キリバリワ

二十二頁

マダラニ　ナリテ　ミグルシカラン>ト　ユウ』　ゼンニ　ワレモ　ノチニワ
ハリカエント　オモエド」　スベテ　モノワ　ヤブレタル　トキ　ツクロエバ
シバラクワ　ナオ　ヨオオ　ナス　モノゾト」　ワカキ　ヒトニ　シラセントテ
カク　スルナリ>ト　コタエヌ』

〔甲〕〔乙〕オボツカナキ、又はオボツカナキといふ人もある。
此の文語文の朗讀（抑揚調子等）については前課と同じ。
『召使に』を強める。『こと〴〵く』を強める。次の『張りかへ給へ』を強めてはよくない。

ダイ　ロク』　テマリ』　リョオカン』

カスミ　タツ　ナガキ　ハルビオ　コドモラト　テマリ　ツキツツ　コノヒ

二十三頁

クラシツ』
コドモラト　テマリ　ツキツツ　コノ　サトニ　アソブ　ハルビワ
クレズトモ　ヨシ』
アメモ　ミズモ　ヒトツニ　ミユル　ウミノ　ウエニ　ウカビイデタル
サドガ　シマヤマ』

〔甲〕クレズトモ、又はクレズトモといつてもよい。
〔乙〕「三十一文字」の短歌は指導の段階として、五・七・五・七・七の各句を切つて形式を示し、且つ五七五の「上の句」と七七の「下の句」との間で切つて示すことが勿論大切であるが、朗讀の完成の時は、意味による切れ目と聲を一致させることが必要である。卽ち

かすみ立つ長き春日を」子供らと手まりつきつゝこの日くらしつ
子供らと手まりつきつつ」この里に遊ぶ春日は」暮れずともよし

天も水もひとつに見ゆる海の上に　浮かび出でたる佐渡が島山

の如く横線（一）の所で切るのが一例である。

ダイ　シチ』　チイサナ　ネジ』

二十四頁

クライ　ハコノ　ナカニ　シマイコマレテ　イタ　チイサナ　テツノ

ネジガ　フイニ　ピンセつトニ　ハサマレテ　アカルイ　トコロニ

ダサレタ』―』

ネジワ　オドロイテ　アタリオ　ミマワシタガ　イロイロノ　モノノ　オト

イロイロノ　モノノ　カタチガ　ゴタゴタト　ミミニ　ハイリ　メニ　ハイル

バカリデ　ナニガ　ナニヤラ　サつパリ　ワカラナカつタ』―』

シカシ　ダンダン　オチツイテ　ミルト　ココワ　トケエヤノ　ミセデ

二十五頁

アル　コトガ　ワカつタ』　ジブンノ　オカレテ　イルノワ」　シゴトダイノ

ウエニ　ノつテ　イル　チイサナ　フタガラスノ　ナカデ」　ソバニワ

チイサナ　シンボオヤ　ハグルマヤ　ゼンマイナドガ　ナランデ　イル』

キリヤ　ネジマワシヤ　ピンセつトヤ　チイサナ　ツチヤ　サマザマノ

ドオグモ」　オナジ　ダイノ　ウエニ　ヨコタワつテ　イル』　シュウイノ

カベヤ　ガラストダナニワ　イロイロナ　トケエガ　タクサン　ナランデ

イル』　カチカチト　キゼワシイノワ　オキドケエデ」　カつタリ　カつタリト

オオヨオナノワ　ハシラドケエデ　アル』―』

ネジワ　コレラノ　ドオグヤ　トケエオ　アレコレト　ミクラベテ」　アレワ

ナンノ　ヤクニ　タツノデ　アロオ　コレワ　ドンナ　トコロニ

オカレルノデ　アロオ　ナドト　カンガエテ　イル　ウチニ」　フト　ジブンノ

二十六頁

コトニ　カンガエオヨンダ』
ナント　ユウ　チイサイ　ナサケナイ　ジブンデ　アロオ』　アノ
イロイロノ　ドオグ　タクサンノ　トケエ」　カタチモ　オオキサモ　ソレゾレ
チガつテワ　イルガ」　ドレオ　ミテモ　オオキクテ　エラソオデ　アル』
ヒトカドノ　ヤクメオ　ツトメテ　セケンノ　ヤクニ　タツノニ　ドレモ
コレモ　フソクワ　ナサソオデ　アル』　タダ　ジブンダケガ　コノヨオニ
チイサクテ　ナンノ　ヤクニモ　タタチソオニ　ナイ』　アア　ナント　ユウ
ナサケナイ　ミノウエデ　アロオ』」
フイニ　バタバタト　オトガ　シテ」　チイサナ　コドモガ　フタリ　オクカラ
カケダシテキタ』　オトコノコト　オンナノコデ　アル』　フタリワ　ソコラオ
ミマワシテ　イタガ　オトコノコワ　ヤガテ　シゴトダイノ　ウエノ　モノオ

二十七頁

アレコレト　イジリハジメタ』　オンナノコワ　タダ　ジつト　ミマモつテ
イタガ」　ヤガテ　カノ　チイサナ　ネジオ　ミツケテ」
マア　カワイイ　ネジ』

二十八頁

オトコノコワ　ユビサキデ　ソレオ　ツマモオト　シタガ」　アマリ
チイサイノデ　ツマメナカつタ』　ニド　サンド　ヤつト　ツマンダト
オモウト　スグニ　オトシテ　シマつタ』　コドモワ　オモワズ　カオオ
ミアワセタ』　ネジワ　シゴトダイノ　アシノ　カゲニ　コロガつタ』」
コノトキ　オオキナ　セキバライガ　キコエテ」　チチノ　トケエヤサンガ
ハイつテキタ』　トケエヤサンワ」　ココデ　アソンデワ　イケナイ>ト
イイナガラ　シゴトダイノ　ウエオ　ミテ」　ダシテ　オイタ　ネジノ
ナイノニ　キガツイタ』　ネジガ　ナイ』　ダレダ　シゴトダイノ　ウエオ

二十九頁

カキマワシタノワ』アア　ユウ　ネジワ　モオ　ナクナッテ　アレ
ヒトツシカ　ナイノダ』アレガ　ナイト　チョオチョオサンノ
カイチュウドケエガ　ナオセナイ』サガセ　サガセ―』
ネジワ　コレオ　キイテ　トビアガル　ホド　ウレシカッタ』ソレデワ
ジブシノ　ヨオナ　チイサナ　モノデモ　ヤクニ　タツ　コトガ
アルノカシラト』ムチュウニ　ナッテ　ヨロコンダガ』コノ　ヨオナ
トコロニ　コロゲオチテ　シマッテ　モシ　ミツカラナカッタラト　ソレガ
マタ　シンパイニ　ナッテキタ』―』
オヤコワ　ソオガカリデ　サガシハジメタ』ネジワ　ココニ　イマス>ト
サケビタクテ　タマラナイ』サンニンワ　サンザン　サガシマワッタガ
ミツカラナイノデ　ガッカリ　シタ』ネジモ　ガッカリ　シタ―』

三十頁

ソノトキ　イママデ　クモノ　ナカニ　イタ　タイヨオガ　カオオ
ダシタノデ』ニッコオガ　ミセ　イッパイニ　サシコンデキタ』スルト
ネジガ　ソノ　ヒカリオ　ウケテ　ピカリト　ヒカッタ』シゴトダイノ
ソバニ　フサギコンデ　シタオ　ミツメテ　イタ　オンナノコガ　ソレオ
ミツケテ』オモワズ　アラ>ト　サケンダ』
チチモ　ヨロコンダ』コドモモ　ヨロコンダ』シカモ　イチバン
ヨロコンダノワ　ネジデ　アッタ』トケエヤサンワ　サッソク　ピンセットデ
ネジオ　ハサミアゲテ』ダイジソオニ　モトノ　フタガラスノ　ナカエ
イレタ』ソオシテ　ヒトツノ　カイチュウドケエオ　ダシテ　ソレオ
イジッテ　イタガ』ヤガテ　ピンセットデ　ネジオ　ハサンデ　キカイノ
アナニ　サシコミ』チイサナ　ネジマワシデ　シッカリト　シメタ』

三十一頁

リュウズオ　マワスト」イママデ　シンダ　ヨオニ　ナつテ　イタ
カイチュウドケエガ　タチマチ　ユカイソオニ　カチカチト　オトオ
タテハジメタ』ネジワ」ジブンガ　ココニ　イチオ　シメタ　タメニ　コノ
トケエ　ゼンタイガ　フタタビ　カツドオスル　コトガ　デキタノダト
オモウト」ウレシクテ　ウレシクテ　タマラナカつタ』トケエヤサンワ
シアゲタ　トケエオ　チョつト　ミミニ　アテテカラ」ガラストダナノ
ナカニ　ツリサゲタ』」

三十二頁

イチニチ　オイテ　チョオチョオサンガ　キタ』
トケエワ　ナオリマシタカ」
ナオリマシタ』チイサナ　ネジガ　イつポン　イタンデ　イマシタカラ
トリカエテ　オキマシタ」グアイノ　ワルカつタノワ　ソノ　タメデシタ>ト

イつテ　ワタシタ』ネジワ」ジブンモ　ホントオニ　ヤクニ　タつテ
イルノダント　ココロカラ　マンゾクシタ』

〔甲〕

フタガラス、ガは「鼻音」のガに言はない。ツチ「槌」は平板式。比較、ツチ「土」。カつタリ（時計の音）はアクセント不定。カつタリの様に言つてもよいであらう。カンガエオヨンダ、又は平板式にいふ人もある。カンナンノ　ヤクニモ、ナンノは又平板式にもいふ。アア「嗚呼」、アクセント不定。

〔乙〕

『見合はせた』日常の言葉ではミアワシタといふのが常である。
サガシマワつタガ、又はサガシマワつタガ。ミセ　イつバイニ、又は續けてミセイつバイニ。ミツメテ　イタ、又は續けてミツメテイタ。アラ、アクセント不定、但しかういふ場合女の言葉として「ア」の方を高い調子でいふのが常である。
『ピンセットにはさまれて明かるい』の間は切らない方がよい。『さつぱり』を強める。『ふたガラス』を稍強める。『かつたりかつたり』はゆつくり言ふべきである。
（二十五頁八行）『何といふ』を強める。『大きくて、えらさう』の間は切らない方がよ

い。

(二十八頁三行)『誰だ』の終『…かき廻したのは』の終は尻下りの調子。『飛上る程』を強める。『小さな者でも、役に立つ』の間は切らない方がよい。

(二十九頁一行)『それが又』を稍強める。

(三十頁一行)『そばに、ふさぎ込んで』の間は切らない方がよい。『一番喜んだのはね。ぢで』と『ねぢ』を強める。

(三十二頁二行)『其のため』を強める。

ダイ ハチ』 グンカンセエカツノ アサ』

ヒガシノ ソラガ アカルク ナルト」 イ・ママデ グンコオノ ヤミニ

ツツマレテ イタ グンカンノ ソオダイナ スガタガ ダンダンニ

アラワレテ クル』 コオカンバンニワ トオチョクショオコオノ スガタガ

三十三頁

ミエ」 カンキョオニワ ボオエンキョオオ モつタ ショオシンゴオヘエガ

トオクオ ミハつテ イル』 ゲンモンニワ ジュウオ テニ シタ

バンペエガ アタリオ ケエカイシテ イル』 センスウヒャクニンノ

ジョオインワ ナオ ヤスラカナ ネムリオ ツズケテ イルノデ アロオ』

カンナイワ ミヤマノ ヨオナ シズカサデ アル』

ヒトノ カオガ ヤつト ミワケラレル ヨオニ ナつタ コロ」

ジショオバンペエガ コトコトト コオカンバンニ キテ」 ソオイン オコシ

ゴフンマエ>ト トオチョクショオコオニ ホオコクスル』 グンカンノ

キショオジコクワ」 ナツワ ゴジ フユワ ロクジデ アル」 マモナク

カンバンシカンヤ デンレエインガ オキテ クル』 フクチョオモ ハヤ

ジョオカンバンニ アラワレテ」 キョオノ テンキワ ドオカト ソラオ

三十四頁

三十五頁

ナガメル〓

ヤガテ　ゴゼン　ゴジノ　カネガ　ナルト　トオチョクショオコオガ

ゲンキノ　ヨイ　コエデ　ゴオレエオ　カケル〓

ソオイン　オコシ〓

コノ　ゴオレエデ　アサノ　シズカサガ　タチマチ　ヤブラレ

キショオラつバワ　イサマシク　ヒビキ　デンレエインワ　ゴオテキオ

フキナガラ　ソオイン　オコシ>ト　ヨンデ　ツリドコノ　アイダオ　ヌつテ

イク〓　スルト　ジョオインワ　イっセエニ　トビオキテ　テバヤク

ツリドコオ　ククル〓　コレカラ　ゴオレエガ　ツギツギニ　クダル〓　ソレニ

ツレテ　ツリドコワ　タダシク　イつテエノ　バショニ　オサメラレル〓

スベテノ　マドヤ　デイリグチワ　ヒラカレル〓　コレラノ　シゴトワ

三十六頁

リクジョオノ　イエデ　マイアサ　オキルト　マズ　ヤグオ　カタズケ

アマドオ　クルノト　カワリワ　ナイガ　センスウヒャクニンノ

ジョオインガ　ゴオレエニ　シタガっテ　キリツ　タダシク　カツドオスル

ソノ　サマワ　イカニモ　メザマシイ〓　スウフンノ　ウチニ　カンナイワ

スっカリ　セエトンスル〓

ソコデ　ゴフンカンノ　キュウケエガ　アっテ　ロテンカンバンアライト

ナル〓　コレワ　スイへエインノ　ウケモチデ　マズ　リョオゲンチョク

セエレツノ　ラつバガ　ヒトキワ　タカク　ヒビキワタルト　ハダシノ

ママノ　スイへエインガ　コオカンバンニ　ハセアツマつテ　ズラリト

セエレツスル〓　リョオゲンチョクト　ユウノワ　トクベツノ　ツトメノ

アル　モノオ　ノゾイタ　ホカノ　スイへエインノ　コトデ　アル〓

三十七頁

マモナク　トオチョクショオコオカラ　イセエノ　ヨイ　ゴオレエガ
カカル〃
ロテンカンバン　アラエ〃
スイヘエワ　クモノコオ　チラス　ヨオニ　ハつポオエ　チつテ
カイガイシク　ズボンオ　マクリアゲ　ミガルナ　スガタニ　ナつテ
ブンタイゴトニ　カンバンアライオ　ハジメル〃　マズ　カシカンガ
カンバンノ　トスイコオカラ　フキデル　カイスイオ　オケニ　クンデワ
ドンドン　ナガスト　アライバケオ　モつタ　スウジュウニンノ　スイヘエガ
カンバンオ　コスリナガラ　アタマオ　ナラベテ　ススンデ　イク〃
カンバンアライガ　スムト
カオ　アラエ〃　タバコボン　ダセノ　ゴオレエガ　クダル〃　ソコデ

三十八頁

ハジメテ　ジョオインワ　カオオ　アラウ〃　ソノウチニ　ジョオリクインガ
キカンスル　ソココデ　オハヨオガ　イイカワサレル〃　ヒナワ
イつポンノ　タバコボンノ　マワリニワ　ヒトノ　ヤマガ　デキテ
イロイロノ　ハナシガ　デル〃　ワライゴエモ　オコル　マモナク
ショクジノ　ラつパガ　ヒビク〃　イチジカンアマリモ　カツドオシタ　アトデ
アルカラ〃　ショクジノ　ンマイ　コトワ　ユウマデモ　ナイ〃
ゴゼン　ハチジニ　ナルト　カンビノ　ハタザオニ　グンカンキガ
アゲラレル〃　キミガヨノ　ラつパガ　ソオセラレ〃　エエヘエタイワ
ササゲツツノ　ケエレエオ　オコナイ　カンチョオオ　ハジメ　ジョオイン
イチドオワ　ミナ　シセエオ　タダシテ　グンカンキニ　ケエレエスル〃
アサヒニ　カガヤク　ダンカンキガ　カイフウニ　ヒラメキナガラ

三十九頁

シズシズト　アガつテ・イク　サマワ　ジツニ　オゴソカデ　アル』―』

グンカンキオ　アオイデ　ココロノ　ソコマデ　キヨメラレタ　ジョオインワ

コレカラ　クンレンニ　トリカカルノデ　アル』

〔甲〕　センスウヒャクニン、別々にはセン　スウヒャクニンである。ヤスラカナ、又はヤスラカナ。

『午前』ゴゼン、又はゴゼン。『場所』バショ、又はバショ。ズラリト、又はズラリト。

キミガヨノ、此の歌の名稱は唱歌の旋律に從つてキミガヨといふことがある。

〔乙〕　「總員起し五分前。」>と。

「總員起し。」>と呼んで(三十四頁九行)

の>此の符號の所は切るのがよい。その前の言葉を號令の口調でいふためである。

(三十五頁三行)『これらの仕事は』で切つて『陸上の家で…』から『變りはないが』まで續ける方がよい。

『「兩舷直、整列。」のラッパ。』この)符號の所は切らないでよい。號令でなくてラッパだからである。

『「顏洗へ」「煙草ぼん出せ。」の』この言葉を號令の口調でいふ時は「の」の前で切つた方が言ひ易い。さうでなければ切らないでよい。『お早うが』の間は切らない方がよい。『食事の』『君が代の』の「の」の前は切らない。

ダイ　ク』　ンマゾロエ』

ヤマウチ　カツトヨ　オダ　ノブナガニ　ツカエテ　イマダ　ヒ

アサカリシ　コロ　イつピキノ　リョオバオ　ウリニ　キタレル

モノ　アリ』　ノブナガノ　カシンラ　コレオ　カワント　オモエド

アタイノ　タカキオ　キキテ　ミナ　モトメカネタリ　カツトヨハ　ワケテ

イエモ　マズシケレバ　タダ　ココロニ　ホシト　オモウノミニテ　ムナシク

四十一頁

イエニ　カエリヌ『一』

サテサテ　カネ　ナケレバ　センカタ　ナケレド』　アレホドノ　メエバ

プシト△　シテ　テニ　イレタキ　モノナリ>ト△　ヒトリゴトノ　ヨオニ

ユウオ』　カツトヨノ△　ツマ△　キキテ』　ソノ　ンマワ　イカホドノ

アタイニヤ>ト　トウ』　カツトヨ△　タダ』　オオゴン　ジュウリョオ>ト

コタエタル　ママ』　ウデオ　コマヌキテ△　マタ　カタラズ』

サラバ　ソノ　ンマ　モトメタマエ>トテ』　ツマワ　カガミバコヨリ

チイサキ　ヒトツツミオ△　トリイダシテ△　オつトノ　マエニ　サシイダス

ヒラケバ　マバユキ　バカリノ　オオゼン　ジュウリョオナリ』　カツトヨ△

ソモソモ　コレワ　イカナル　カネゾ』　ワレラ　トシ　ヒサシク△　ヒンニ

クルシミタルニ』　オンミワ　ナニトテ　コノ　カネノ　アル　コトオ

四十二頁

キョオマデ　ワレニ　カタラザリシゾ>ト　ナジル』

ツマワ　シズカニ　コタエヌ』

ワラワ　コノ　イエニ　マイリシ　トキ』　マズシトテ△　ツイヤス　コト

ナカレ』　オつトノ　ダイジ　アラン　トキノ　ヨオニ　セヨ>トテ』　チチヨリ

ワタサレシワ　コノ　カネナリ』　キケバ△　チカク　ミヤコニテ

ノブナガコオノ　オンンマゾロエノ　アル　ヨシ』　サダメテ　ジマンノ

シマニ　ノリテ　アツマル　ヒトビト△　オオカラン』　イマコソ　キミワ

ソノ　リョオバオ　モトメテ　シュクンノ△　オホメニ　アズカリタマエ』

カツトヨワ　ツマノ　フカキ△　ココロザシニ　シャセリ』　カクテ△　カノ

シンマワ　カツトヨノ△　モノト　ナリヌ『一』

ヤガテ　ンマゾロエノ　ヒワ　キタレリ△』　イズレ　オトラヌ　ンマ　オオク

四十三頁

アツマリ　キタレル　ナカニ　ヒトキワ　メダチテ　タクマシキ　ンマオ
ノブナガ　メニ　トドメテ
アっバレ　メエバ　タレノ　ンマゾ>ト　トエバ　カシン　コタエテ
ヤマウチ　カツトヨノ　ンマ>ト　ユウ　ノブナガ　ヒゴロ　マズシト
キキシ　カツトヨガ　ヨクモ　カカル　メエバオ　モトメシ　モノゾ
ミアゲタル　ココロザシ>ト　シバシ　カンジテ　ヤマザリキ

〔甲〕カツトヨ、通常人のいふ如く「づ」を「濁音」にいふ時はカズトヨである。モノ　アリ、多くは續けてモノアリといふ。モトメカネタリ、又はモトメカネタリともいふ。サテサテ、アクセント不定、此處は平板式の様に言つてよい。

〔乙〕オンミワ、又は平板式。オンンマゾロエ、ンは(m)の音節、こゝは(m)が二音節を成す。ワラワ、又はワラワといふ人もある。

一豊の言葉『さて〳〵』以下は、ゆつくり沈んだ調子で言ひ、而も『さて〳〵』の次

『せん方なけれど』の次など十分に切つて言ふのがよい。『黄金十兩』も沈んだ調子で言ひ、その終で十分休止を置くと、「又語らず」といふ心持が良く現れるであらう。妻の言葉『さらば其の馬求め給へ』は力ある聲でいふ。但し餘り大きい聲では良くない。後の言葉(四十二頁)と同じく「靜かに」言ふべきである。次の一豊の言葉は「なじる」様に言ふべきである。やゝ強く、驚きの心とせき込む心とをこめる。『いかなる』を強める。『何とて』を強める。

『なじる』の次に休止を置く。妻が「靜かに」答へる心持が此の休止で一層良く現れる。

『用にせよとて』の『とて』の前は切らない方がよい。『今こそ』を強める。

妻の言葉の終(『あづかり給へ』の次)にも休止を置く。一豊の感激の心を表現するためである。

『一きは目立ちて』『誰の』『よくも』をそれ〳〵強める。『誰の馬ぞ』の終は尻下りの調子。

此の課は文語文であるが、上に記した様に口語と同様の切り方抑揚調子を附けて良く

心持の表現に注意すべきである。

ダイ ジュウ』 マツダイラ ノブツナノ ヨオジ』

四十四頁

マツダイラ ノブツナワ ヨオメエオ チョオシロオト イエリ』
クサイニシテ ショオグンノ ワカギミ タケチヨニ ツカエタリ』
チョオシロオ ジュウイつサイノ トキナリキ』 アルヒ タケチヨ カナタノ
ゴテンノ ノキバニ スズメノ スクイタルオ ミツケテ』 チョオシロオ
スズメノ コオ トつテ マイレ>ト メエジヌ』 ヒ クレテ ノチ
チョオシロオ コナタヨリ ヤネズタイニ ユキテ イマヤ トラント スル
トキ』 フト フミソンジテ ナカニワニ ドオト オツ』
ショオグン ヒデタダ カタナ トリテ ショオジオ ヒキアクレバ』

四十五頁

ミダイドコロ トモシビ トリテ イデラル』 ミレバ チョオシロオナリ』
ショオグン』
ナンジ ナニシニ ココニ キタレルゾ』
スズメノ スクイタルオ ミテ アマリノ ホシサニ マイリテ ソオロオ
イヤイヤ オノレノ ココロニテワ アルマジ タレニ オシエラレテ
キタレルゾ』
イナ オシエラレタルニワ ソオラワズ』
イクタビ セメ トワルレドモ チョオシロオノ コタエワ ハジメニ
カワラザリキ』
オノレ アリノママニ モオサザルワ フトドキナリ>トテ』 オオキナル
フクロニ チョオシロオオ オシイレ クチオ フウジテ』

四十六頁

アリノママニ　モオサザル　アイダワ　イツマデモ　カクテ　アルベシントテ」

フクロオ　ハシラニ　カケラレタリ『』

ヨクチョオ　ミダイドコロ　チョオシロオノ　ココロオ　アワレミテ」

テズカラ　フクロオ　ヒラキ」　ショクオ　アタエテ　フタタビ

フウゼラル『』

ヒルゴロ　ショオグン　マタ　チョオシロオニ　トワルレドモ」　チョオシロオ

ツイニ　コトバオ　カエズ』　カタワラヨリ　ミダイドコロ　ワビゴト　アリ」

ハジメテ　ユルサレヌ』　アトニテ　ショオグン　ミダイドコロニ　ムカイテ」

カレガ　イマノ　ココロニテ　ヒトト　ナラバ」　タケチヨニワ　ムニノ

チュウシンタルベシントテ」　オオイニ　ヨロコバレタリトゾ」

〔甲〕　マツダイラ、又はマツダイラといふ人もある。チョオシロオ、又は平板式。クサイ、

もしキュウサイといふ時は此の型である。クサイは「臭い」といふ語と同じ發音同じアクセントである。

『巣くひたる』を一つの單語の如くスクイタルと發音する。參考、スクウ(平)、スクイタル「救」「抄」。トつテ　マイレ、又は續けてトつテマイレ。ユキテ、「キ」に母音無聲化を起す時はユキテといふ。チョオシロオナリ、『長四郎』を平板式にいふ時、「なり」を附けた形はチョオシロオナリである。イヤイヤ、アクセント不定。此處は平板式の様に言つてよい。セメトワルレドモ、又はセメトワルレドモ。アルベシ、又はアルベシ。

〔乙〕

『軒端に、雀の』の間は切らない方がよい。切ると「軒端に見つけ」た様な意味に聞える恐がある。『どうと』を强める。『どうと落つ』の次『將軍秀忠』云々へ移る間は殆ど休止を置かない位にいふのが良い。『汝何しにこゝに來れるぞ』は强い聲でいふ。その次はやゝ休止を置いて長四郎の答をいふ。長四郎が將軍を見てゐるすまひを直す時間、稍考へてから答をする心を表現するためである。長四郎の答は小さい聲、しかし力のある聲でいふと良い。『不屆』を可なり强く言つて良い。『食を與へて、再び』の間は切

らない方がよい。

四十八頁

ダイ　ジュウイチ　スズメノ　コ　イっサ

スズメノ　コ　ソコ　ノケ　ソコ　ノケ　オンマガ　トオル

サア　ゴザレ　ココマデ　ゴザレ　スズメノ　スズメノ　コ

アカンマノ　ハナデ　フキケリ　スズメノ　コ

ヤセガエル　マケルナ　イっサ　コレニ　アリ

ヤレ　ウツナ　ハエガ　テオ　スル　アシオ　スル

〔甲〕ハエ、日常の俗語でハイといふことが多い。こゝはハエといふ方がよい。

〔乙〕特に記すべきことなし。

四十九頁

ダイ　ジュウニ　アメリカダヨリ

サンフランシスコカラ

ミナサン　ゲンキデスカ　ハワイカラ　ダシタ　テガミワ　ミタデショオネ

アレカラ　ナオ　コオカイオ　ツヅケテ　イツカメノ　ゴガツ　ニジュウ

イチニチ　サンフランシスコニ　ツキマシタ

フネガ　キンモンカイキョオニ　サシカカっテ　サユウニ　ヤマオ

アオギナガラ　イチロ　アイオ　タタエタ　ヨオナ　スイロオ　ススンダ

トキワ　ナントナク　ムネガ　オドル　ヨオデシタ　ヤガテ　ユクテニ

キンモンキョオガ　ミズギワ　タカク　アラワレ　ソレオ　スギルト

五十頁

ガンカイガ　ヒラケテ　ワンノ　ミギテニ　ダイシガイガ　ミエダシマシタ
オオゾラニ　ソソリタツ　ニジっカイノ　サンジっカイノ　ダイケンチク
タイガン　オオクランドエ　ワタス　ロクセン　キュウヒャクメエトルノ
スバラシイ　チョオキョオ　ソオ　ユウ　モノオ　ミタ　ダケデ　アア
アメリカダナト　ツクズク　カンジサセラレマシタ
ココワ　アメリカ　ガっシュウコクノ　ウラモントモ　イワレル
ジュウヨオナ　バショデスカラ　ミナトヤ　マチノ　ニギヤカナ　コトワ
ユウマデモ　アリマセンガ　マタ　チョオボオノ　ヨイ　コトデモ
ユウメエデス　ミナトカラ　コオホオノ　コオチエ　カケテ　シガイワ
ゴバンノ　メノ　ヨオニ　ツズイテ　イマスカラ　イタル　トコロ　マチワ
キュウナ　サカニ　ナっテ　イマス

五十一頁

トコロニ　タっト　キっト　ミナトノ　ケシキガ　タカイ　タテモノノ
アイダヤ　ウツクシイ　マチノ　ウエナドニ　アブラエノ　ヨオニ
ミエマス

サンフランシスコニワ　ニつボンジンガ　タクサン　スンデ　イマス
ハワイト　オナジ　ヨオニ　ニつボンジンノ　コドモタチワ　アメリカノ
ショオガっコオト　ニつボンゴガっコオト　リョオホオエ　カヨっテ　イマス
イマ　ワタクシガ　トマっテ　イル　リョカンモ　ニつボンジンノ
ケエエデスガ　コトシ　ココノツニ　ナル　ヤエチャント　ユウ
オンナノコワ　エエゴモ　ニつボンゴモ　ヒジョオニ　ジョオズデス
ミョオゴ　ニジュウ　ゴニチニ　ココオ　タっテ　ミナミノ
ロスアンゼルスエ　イク　ツモリデス

〔甲〕

サンフランシスコ、これが日本語として慣用のアクセントである。而して、それで原語（英語 San Francisco）のアクセントに近いのである。ハワイ（平）、又はハワイ。（本書巻八、一二五頁参照）『金門橋』アクセント不確、今は平板式を採る。オオクランド、これが日本語として慣用されるアクセントである。原語（英語 Oakland）に近くいへばオウクランドであらうが、これは日本語の慣用になつてゐない。『九百米』クヒャクメエトル といふ時は此の型である。アア、アクセント不定、此處は始めのアを高く言つてよい。イタル トコロ、又は續けて平板式にもいふ。コダカイ、又は平板式にもいふ。『經營』通常の發音ではケエエエである。但し「エ」の音が續き過ぎる故にケイエエといふ方が明瞭になる。『兵營』原讀本巻七、四十七頁、本書巻七、五六頁參照。ロスアンゼルス、原語（英語、元スペイン語から來た名、Los Angeles）に近くいへば ロスアンジェレス、又はロスアンゲレスであらう。スペイン語風にいへばロスアンヘレスである。

〔乙〕

此の課は手紙を人に朗讀して聽かせるといふ心持でいふのがよい。『元氣ですか』の終は日常自然の言葉ならば尻上りの調子でいふ所である。此處もその通りに言つてよい。

『見たでせうね』の終は一ぺん上つて直下る調子。『山を仰ぎながら、一路』の間『アメリカだなと、つく〳〵』の間は切らない方がよい。五十一頁の『町の上などに、油畫の』『日本語學校と、兩方』の間も切らない方がよい。

ロスアンゼルスカラ』

サンフランシスコカラ　ロスアンゼルスマデノ　アイダワ」　アメリカ
ガつシュウコクデモ　イチバン　ケシキノ　ヨイ　トコロダト　イワレテ
イマス』　ヒダリワ　ヤマ　ウミ」　コノ　アイダオ　キシャワ」
シバシバ　ジュウスウメエトルグライノ　タカサノ
サンブクオ　ヌつテ　ハシリマス」　ガンカニ　ヒロガル　タイヘエヨオオ
ミワタシナガラ」　アノ　ムコオニ　ニつポンガ　アル」　ミナサンニ

五十三頁

ミオクつテ　イタダイタ　ヨコハマガ　アルト　オモウト　キュウニ
ナツカシク　ナリマシタ』
ロスアンゼルスワ　ナンゴクテキナ　トシデス』　マチニワ　ヤシノ　ハガ
シゲリ』　フユモ　バラノ　ハナガ　サクト　イイマス』
カリフォルニヤシュウノ　ナンブワ　ニつボンジンガ　ハヤクカラ　キテ
ノオギョオオ　イトナンダ　トコロデ　ロスアンゼルスワ　ソノ
チュウシンチデスカラ』　シナイニワ　リつバナ　ニつボンジンマチガ
アリマス』　ニつボンノ　ショモツヤ　ザっシヤ　ザっカヤ
ショクリョオヒンナドオ　ウつテ　イルノガ　ミカケラレマス』
ウツクシイノワ　クダモノヤデ』　ミルカラニ　オイシソオナ　クダモノガ
ヤマノ　ヨオニ　ツマレテ　イマス』　ノキナミニ　ニつボンゴガ　キカレ』

五十四頁

ニつボンジンノ　コドモヤ　オンナノ　ヒトガ　ミセサキデ　ニコニコ　シテ
イマス』　ショオワ　シチネンノ　ナツ』　ココデ　ヒラカレタ
オリンピっクタイカイニ　ニつボンノ　センシュガ　メザマシイ　カツヤクオ
シタ　コトワ　イマモ　マチノ　ウレシイ　ワダイニ　ナっテ　イマス』
サンフランシスコデモ　ココデモ　ワタクシワ　オオクノ　ガっコオオ
タズネマシタガ』　キっト　ニつボンジンノ　コドモノ　セエセキノ　ヨイ
コトオ　キカサレテ　ナミダガ　デルホド　ウレシク　オモイマシタ』
シカシ　マタ　ムジャキデ　カっバツナ　アメリカノ　コドモガ
キョオシツデワ　オギョオギノ　ヨイノニモ　スつカリ　カンシンシマシタ』
ミナサンワ　オギョオギノ　ヨイ　コトデモ　アメリカノ　コドモニ
マケナイデショオネ

〔甲〕シバシバ(平)、又はシバシバ。タカサ(平)、又はタカサ。カリフォルニヤ、一つ離しては此のアクセントが日本語の慣用であり、同時に原語（英語 California）のアクセントにも近い。ノオギョオ、又はノオギョオ。クダモノヤ(平)、又はクダモノヤ。シヨオワ シチネン、續けてはシヨオワシチネンといふ。オリンピック、一つ離してはこれが日本語のアクセントの慣用になりつゝある。又「ピ」に母音無聲化を起すことが多い。原語（英語 Olympic）に近くいへばオリンピックであらう。

〔乙〕『市内には、りつばな』の間、『昭和七年の夏、こゝで』の間は切らない方がよい。『涙が出る程』を強める。『しかし、又』の次は讀點が無いけれども切つた方がよい。

シカゴカラ』

ニジュウ クニチノ アサ ロスアンゼルスオ キシャデ タつテ ユウガタ
アリゾナシュウノ サバクニ サシカカリマシタ』 コノ サバクワ

ヨクジツマデ ツズキマシタ』 ミワタス カギリ コオリョオタル
ケシキデシタ』 タマサカ オオキナ サボテンガ アル クライノ
モノデス』 ミナサンワ」 アメリカ ガつシュウコクニ サバクガ
アロオナドトワ オモワナカつタデショオ』 シカシ」 ソレオ スギルト
マつタク ヨクヤ センリノ ダイヘエゲンデシタ』 ムゲンノ ハタケ
ボクジョオ モリ ハヤシ ソオシテ マバラナ ソンラクト イクツカノ
トシ」 ソノ アイダニ セカイダイイチト イワレル ミシシつピガワガ
ヨオヨオト ナガレテ イマシタ』』
ミつカ フタバン ハシリツズケテ」 サンジュウ イチニチノ ヨル
シカゴニ ツキマシタ』
ミシガンコト ユウ スバラシク オオキナ ミズウミニ ノゾンデ イル

五十七頁

コノ　シカゴワ　アメリカ　ガつシュウコクノ　イチダイショオコオトシデス
ココニ　クルト　モオ　サンフランシスコノ　ウツクシサモ
ロスアンゼルスノ　ナゴヤカサモ　アリマセン　マチワ　イタル　トコロ
ゴつタガエシテ　イマス　ジドオシャワ　カワセノ　ヨオニ　ツズイテ
ハシつテ　イマス
アメリカワ　ドコデモ　コクジンオ　シカケマスガ　シカゴニ　コクジンノ
オオイノニワ　オドロキマシタ
アつテ　イチニチニ　ナンマントオト　ユウ　ブタヤ　ウシオ　ショリシテ
イマスガ　ハタライテ　イルノワ　タイテエ　コクジンデス　ヒロイ
ジョオナイオ　イチジュンスル　アイダニ　ブタヤ　ウシガ　ハダカニ　ナリ
ニクニ　ナリ　ハムニ　ナリ　マタ　カンズメニ　ナつテ　イクノガ

五十八頁

ジュンジョ　ヨク　ミラレマス
シカゴワ　コノヨノ　ジゴクダト　イつタ　ヒトモ　アルホド
サつプウケエナ　トコロデスガ　イマワ　チョオド　シンリョクノ　キセツデ
コガンノ　オオドオリヤ　コオエンノ　ナガメワ　サスガニ　ウツクシイト
オモイマシタ

〔甲〕シカゴ、これが原語（英語 Chicago）のアクセントに近く、又日本語としても此の型でいふ事があるから此處に採用した。又はシカゴと平板式にいふ事もある。『アリゾナ州』と「州」の附く形は アリゾナシュウであるが、一つ離してはアリゾナが原語（英語 Arizona）のアクセントに比較的近い。ミシシつピガワ、始めのシに母音無聲化を起し易いが、こゝは有聲にいふべきである。「川」の附く形のアクセントはミシシつピガワである。單獨ではミシシつピといふのが原語（英語 Mississippi）に近い。ミシガンコ、日本語では「湖」を附けずに單獨にいふ場合が少い様である。原語（英語 Mi-

chigan）に近くいへばミシガン（ガは鼻音でなく）であらう。

［乙］『アメリカ合衆國に、沙漠が』の間は切らない方がよい。『幾つかの都市』の次は切らなければいけない。『其の間に』の次でも切る。『ミシシッピ川が、洋々と』の間は切らない方がよい。『豚や牛が』（五十七頁八行）の次は切らなければいけない。『大通や、公園』の間は切らない方がよい。

ニュウヨオクカラ』

セカイダイイチト　イワレル　ニュウヨオクワ　マつタク
コオソオケンチクノ　ダイトシデス』　ニジつカイ　サンジつカイデワ　モオ
イバレマセン』　ゴジつカイ　シチジつカイカラ　トオトオ　ヒャつカイオ
コエテ　シマイマシタ』　マチマチオ　トオルト」　マルデ　ゼっペキノ

五十九頁

ソコデモ　アルイテ　イル　ヨオナ　キガ　シマス』　ソオシテ　ドコモ
カシコモ　イキズマル　ヨオナ　サワガシサ　ニギヤカサデス』
タカイ　タテモノガ　スクスクト　マつスグニ　ソビエテ　イル　バカリデ
ナク」　マチト　ユウ　マチワ　タテモ　ヨコモ　ミナ　チョクセンデス』
コトニ」　チュウオオノ　マンハつタンデワ」　ジュウイクジョオノ　タテノ
オオドオリト　ヨコノ　ムスウノ　トオリトガ　アタカモ　コオシジマノ
ヨオニ　キチント　マジワつテ　イマス』　ソノ　ヨコノ　トオリワ
ヒトツヒトツノ　キョリガ　ヒトシク」　トオリガ　ジュウニデ　ホボ
イチキロメエトルノ　ワリアイニ　ナつテ　イルノダ　ソオデス』

六十頁

ジドオシャノ　メマグルシサワ　モチロン」　チカニワ　チカテツドオ
ガイジョオニワ　コオカテツドオガ　スサマジイ　ヒビキオ　タテテ

六十一頁

ハシつテ　イマス　ソノ　チカテツドオヤ　コオカテツドオマデガ
モオシアワセタ　ヨオニ　ミナミカラ　キタエ　キタカラ　ミナミエト
ワキメモ　フラズ　イつチョクセンニ　ハシつテ　イルノデスカラ
カンガエルト　ショオショオ　オカシクサエ　ナつテ　キマス
コオソオケンチクノ　サイジョオカイニ　タつテ　ナガメタ　ニュウヨオクワ
ソレコソ　テンカノ　キカンデス　タカイ　タテモノガ　マルデ　ハカバノ
セキトオカ　キネンヒノ　ハヤシノ　ヨオニ　ニョキニョキト　タつテ
イマス　カワト　ユウヨリワ　カイキョオト　イつタ　ホオガ　ヨイホド
オオキナ　ハドソンガワト　イイストガワトニ　ツツマレタ　マンハつタンガ
アタカモ　チズノ　ヨオニ　ミオロサレマス　カワギシニ　ソオテ
ギつシリト　ナラブ　フトオワ　スベテデ　イつセンイジョオニ　オヨブ

六十二頁

ソオデスガ　ソレコソ　クシノハ　ドコロデワ　アリマセン　スイジョオノ
フネワ　カゼニ　フキチラサレタ　ムスウノ　コノハニモ
タトエマショオカ　コノ　ヒロイ　カワオ　ワタス　ニジノ　ヨオナ　ハシ
タイガンノ　ウスモヤノ　ナカニ　ツズク　ハテナキ　マチ　ナルホド
アメリカ　ガつシュウコクノ　オモテモント　イワレルダケ　アつテ　ジツニ
ナントモ　イエナイ　ソオカンデス

〔甲〕　ヒャつカイ(平)、又はヒャつカイといふこともある。コトニ「殊に」、又はコトニ。マンハつタン、これが日本語としての慣用アクセントであり、原語（英語 Manhattan）のアクセントに近い。ハドソンガワ、イイストガワ、日本語としては「川」を附けていふことが常であるから、此のアクセントの型でいふ。「川」を附けない形を、もし原語に近くいふとすれば、ハドソン（Hudson）、イイスト（East）であらう。ハテナキ（六十二頁三行）、別々にはハテ（平）ナキであるが、いつも續けて此の型でいふ。

［乙］『格子縞のやうに、きちんと』の間は切らない方がよい。『南から北へ、北から』の間も切らない方がよい。『海峡といつた方がよい程大きな』の次で切るならば、『包まれた』の次でも切る方がよい。さうでないと『大きな』が『マンハッタン』へかゝる様な意味に聞える。

六十三頁

ダイ　ジュウサン』　ブっポオソオ』

ブっポオソオ>ト　ナク　トリノ　コトワ」　センネンノ　ムカシカラ△

ワガクニノ　シヤ　ウタニ　ウタワレテ　イマスガ」　ソノ　コエノ　ヌシガ

ドンナ　トリデ　アルカワ　サイキンマデ　ハっキリ　ワカリマセンデシタ』

ナニシロ」　コオヤサントカ　ヒエエザントカ　ソノホカ　オクフカイ△

ヤマノ　シンリンデ　ヨル　ナクノデス』　ソレニ」　ナク　ジキガ　ダイタイ

六十四頁

ゴロクガツゴロニ　カギラレテ　イマスカラ」　ワカラナカっタノモ　ムリデワ

アリマセン』

タダ　ソノ　コエワ　イカニモ　ヨイ　コエデス』　ブっポオ』　マタワ

ブっポオソオント　ナンカイモ　ナキツズケマス』　ヨフケタ　シンザンノ△

アナタカラ　コナタカラ　ナキカワシナガラ　シダイニ　チカズイテワ」　マタ△

イツノマニカ　トオザカっテ　イキマス』　ソレオ　キクト　マルデ　シンピノ△

セカイニデモ　サマヨっテ　イルヨオナ　オモイガ　シマス』」

トコロデ」　コオユウ　シンザンエ　チョオド　オナジ　ゴロクガツゴロ

ニつボンデワ　メズラシイ　ホドウツクシイ　トリガ　キマス』　ハトヨリ

スコシ△　チイサイ　クライノ　オオキサデスガ」　ゼンタイガ　コイ

ミドリイロデ」　アタマガ　クロク　ノドト　ツバサト　オトワ　コイ

六十五頁

ムラサキイロオ　オビ　クチバシト　アシトワ　マつカデス　ソレニ
リョオホオノ　ツバサオ　ヒロゲタ　トコロオ　シタカラ　ミルト　オオキナ
ハクショクノ　マルイ　ハンモンガ　アザヤカニ　ミラレマス　コノ　トリガ
イツノ　コロカラカ　アノ　ブつポオソオノ　コエノ　ヌシダト　オモワレル
ヨオニ　ナリマシタ　オオクノ　ガカワ　コノ　トリオ　エカキマシタ
ソオシテ　トオトオ　コレガ　ブつポオソオト　ユウ　ナオ　ツケラレテ
シマイマシタ
シカシ　サイキンニ　ナつテ　コレオ　ウタガウ　ヒトモ　アリマシタ
コノ　イロノ　ウツクシイ　ブつポオソオワ　ヒルノ　アイダ　サカンニ
タカイ　キカラ　キエ　トンデ　タダ　ギャギャ>ト　ナクノデスガ　カノ
ブつポオソオノ　コエノ　ヌシワ　ヨル　デテ　ナキマス　ヨル　デテ

六十六頁

サカンニ　ナク　トリワ　フクロオノ　ヨオニ　ヒルマワ　カクレテ
スガタオ　ミセナイ　ハズデス　ダカラ　アノ　ブつポオソオノ　コエノ
ヌシワ　ドオシテモ　ベツノ　トリデ　アロオト　ユウノデス
トコロデ　ショオワ　ジュウネンノ　ロクガツノ　アルヨ　ブつポオソオ>ト
ナク　トリノ　コエノ　ジつキョオガ　ラジオデ　ホオソオサレ　ゼンコクノ
ヒトビトガ　ソノ　ウツクシイ　コエオ　キキマシタ　スルト　アノ
ナキゴエオ　スル　トリナラ　ジブンワ　カつテ　イルト　ユウ　ヒトガ
デテ　キマシタ　ソオシテ　ソノ　カつテ　イル　トリト　ユウノワ　アノ
イロノ　ウツクシイ　トリトワ　マつタク　チガつタ　モノデシタ　テニモ
ノセラレル　ホド　チイサイ　カワイラシイ　ミミズクノ　ヨオナ　トリデ
コノハズクト　ユウ　トリデシタ

コオシテ」センネンライ フシギガラレタ コエノ ヌシガ ハジメテ
六十七頁
ハつキリト ワカリマシタ』ソノ ケっカ イワバ ワガクニニ フタツノ
メエチョオガ デキタ コトニ ナリマシタ』ヒトツワ ワタリドリト
シテ メズラシイ ブっボオソオデス』ソノ ハデナ シキサイカラ ミテモ
ワカル ヨオニ」ガンライ ネつタイチホオノ トリデ」ソレガ ナツノ
アイダダケ ニつボンエ トンデ クルノデス』イマヒトツワ」ミルカラニ
六十八頁
ヒョオキンナ カオオ シタ カワイラシイ コノハズクデス』コレワ
ヒジョオニ メズラシイ トリト ユウノデワ アリマセンガ」シカシ
ゴロクガツノ コロ ブっボオソオ>ト ナク コエワ ナント イっテモ
ウツクシイ フカミノ アル シンピテキナ コエデス』

〔甲〕『全體』（六十四頁三行）、名詞の時は、平板式アクセントでいふ。參考、『全體どうしたの

か』等、副詞の時はゼンタイでである。『畫家』ガカ（平）、又はガカ。ギャギャ、アクセ
ント不定。カっテ イル、「飼」「勝」同じ。參考、カっテ（平）イル「買」「刈」。コノ
ハズク、又はコノハズクといふ人もあらう。『結果』ケつカ（平）、又はケっカ。ネつタ
イチホオ、「チ」に母音無聲化を起さないでいふ時、ネつタイチホオといふこともあ
る。

〔乙〕

『最近まで、はつきり』の間は切らない。『何しろ』の次で切り、『高野山とか、比叡山』
の間は切らない。『ブっボウ』『ブっボウソウ』稍その鳥の聲に擬していふとよいであら
う。『日本では珍しい』を稍強める。『此の色の美しい』の『此の』の次で必ず切ること。
切らないと、『此の色』といふ意味に聞える恐がある。『ブっボウソウの聲の主は夜出
て』の『夜』を強める。但しその下の『夜出て盛に鳴く』の『夜』は強めない。『かく
れて姿を見せない』を強める。
『自分は飼つてゐる』の『飼つて』を強める。次の『其の飼つてゐる鳥といふのは』
の『飼つて』は強めない。

六十九頁

ダイ ジュウシ』 イモホリ』

ゴジカンメノ ジュギョオガ スムト」 センセエワ ニコニコ △シテ」
キョオワ コレカラ ジャガイモオ ホリマショオ』 ミナ イツモノ ヨオニ
ココデ △シタクオ △シテ ガつコオエンエ オアツマリナサイ>ト
オつシャつタ』 コレコソ」 ボクタチガ イつシュウカンモ マエカラ
マイニチ マイニチ マつテ イタ メエレエダつタノデ」 ミナ イつセエニ
コオドリ △シテ ヨロコンダ」 ソオシテ オオイソギデ ガつコオドオグオ
カバンニ シマイ」 メエメエ ミガルニ ナつテ コオシャノ ウシロノ
サイエンニ アツマつタ』 カレカカつテ イチメンニ キイロニ ナつタ
ジャガイモバタケオ」 ゴゴノ ヒガ カンカント テラシテ △イル」』

七十頁

トオバンガ ノオグゴヤカラ クワ シャベルナド イロイロノ ドオグオ
ダシテ △キタ』 センセエモ オオキナ ハコオ モつテキテ」 ホつタ イモワ
コノ ナカエ イレル ヨオニト オつシャつタ』 ミンナワ イつセエニ
ホリニ カカル」 ボクワ」 ワリアイニ △シつカリ △シテ イル イつポンノ
クキオ ニギつテ グつト △ヒっパつタ』 ヤワラカイ クロイ △ツチガ
ムクムク モリアガつタト オモウト △シホオエ クズレル』 ナカカラ」
ミズミズシイ シラチャイロノ タマガ ジュズツナギニ ナつテ
コロコロト デテキタ」 オトナノ ニギリコブシホドノ △オオキサノモ
アレバ」 スズメノ タマゴグライナ カワイラシイノモ アルガ」 ドレモ
ミナ」 キヌノ ヨオナ ウスイ カワガ △ハチキレソオニ ヨク ミガ
イつテ イル』 トナリデワ」 △クキガ △クサつテ △ヒキヌケナイノオ

七十一頁

ホシノクンガ　コンキヨク　ホつテ」　ホつタ　イモオ　ヒトツヒトツ
テエネエニ　ナラベテ　イク』
アチラデモ　コチラデモ　オドロク　コエ　カンシンスル　コエ
ウレシソオナ　コエ』　フト　キガ　ツクト」　コオチョオセンセエト
ヤマダセンセエガ　ハコノ　ソバエ　キテ　オモシロソオニ　ボクラノ
シゴトヲ　ミテ　イラつシャつタ」

〔甲〕『授業』ジュギョオ(平)、又はジュギョオ。『午後の日が』この「日」はヒガ(平)である。ヒガとはいはない。「太陽(の光)」の意味だからである。クワ「鍬」、必ず平板式である。参考、クワ、「桑」。ニギリコブシホドノ(平)、又はニギリコブシホドノ。

〔乙〕『これこそ』を強める。『一週間も』を強める。『黒い土が、むく〳〵』の間は切らない方がよい。『驚く聲』の次は『感心する聲』の次は休止を置くとよい。

七十二頁

ダイ　ジュウゴ』　ハレマ』

サミダレノ　ハレマ　ウレシク」　ノニ　タテバ　ノワ　カガヤキテ」
シラクモオ　トオス　ヒカゲニ　ハヤ　ナツノ　アツサオ　オボユ』
ユク　ミズワ　スコシ　ニゴレド」　セセラギノ　オトモ　マサリテ」
ヨロコビオ　ウトオガ　ゴトク」　ユク　ワレオ　ムコオル　ゴトシ』
デンエンノ　ツズク　カギリワ」　ウエワタス　サナエノ　ミドリ』　ヤマ
トオク　ココロ　ハルバル』　アメツチノ　オオイナルカナ』

七十三頁

フト　ミレバ」　ミチノ　ホトリニ　ツツマシキ　スガタオ　ミセテ」　コキ
ルリノ　イロ」　アザヤカニ　サク　モノワ　ツユクサノ　ハナ』

七十四頁

〔甲〕ハレマ、又はハレマといふ人もある。ウエワタス(平)、又はウエワタス。

［乙］全體を朗かな聲でいひ、明かるい氣持を表現すべきである。又、切り方休止をよく工夫して單調に陷らぬ樣注意するのがよい。各一行の終でもし切るとしても、その切り方、休み方を同じ長さにすると甚しく單調になつて良くないであらう。

七十五頁

ダイ　ジュウロク』　ミカズキノ　カゲ』

ジュウダイノ　カブト』

ジンジロオワ　アニニ　ヨバレテ　ザシキエ　イつタ』　ミレバ　ハハモ

ソコニ　イル』　トコノマニワ　スバラシク　オオキナ　シカノ　ツノト

ミカズキノ　マエダテトノ　ツイタ　カブトガ　カザつテ　アル』　アニワ

アラタマつタ　クチョオデ　イつタ』

ジンジロオ』　コノ　カブトワ　ソセン　デンライノ　タカラ』　コレオ

七十六頁

オマエニ　ユズル』　ジつサイノ　トキ　イクサニ　デテ　テキノ　クビオ

トつタ　ホド　ツヨイ　オマエノ　コトダ』　ドオカ　リっパナ　ブシニ　ナリ

イエノ　ナオ　アゲテ　クレ』

ジンジロオワ　ムネガ　コミアゲル　ヨオニ　ウレシカっタ』

アリガタク　チョオダイ　イタシマス>ト　イつテ　アタマオ　サゲタ』

ハハワ　ソバカラ　イつタ』

ソレニ　ツケテ　ゴシュクン　アマゴケノ　ゴオンオ　ワスレマイゾ』

アマゴケノ　ゴイコオワ　ムカシニ　ピキカエテ　オトロエル　バカリ』

ソレオ　ヨイ　コトニ　シテ　テキノ　モオリガ　グングン　セメヨセテ

クル』　セエジンシタラ　イチニチモ　ハヤク　モオリオ　ウつテ　ゴイコオオ

ムカシニ　カエシテ　オクレ』

七十七頁

ジンジロオノ　メワ　イツノマニカ　ナミダデ　ヒカつテ　イタ』
ジンジロオワ　コノ　ヒカラ　ヤマナカ　シカノスケ　ユキモリト　ナノリ』
ココロニ　カタク　シュカオ　オコス　コトオ　チカつタ』　ソオシテ
ヤマノハニ　カカル　ミカズキオ　アオイデワ』　ネガワクワ』　ワレニ
シチナン　ハつクオ　アタエタマエント　イノつタ』

〔甲〕トコノマ、一つ離しては平板式である。マエダテ、之も平板式である。『尼子家』『子』を「コ」と「清音」にいふ時は、アマコといひ、それに「家」を附ける時は、アマコケ(平)、又はアマコケといふ。チカつタ「盟」、又は平板式にもいふ。

〔乙〕『御恩を忘れまいぞ』の終は尻上りの調子で言つた方が氣持がよく表れる。『願くは我に七難八苦を與へ給へ』は稍ゆつくり、低い聲、しかし力のある聲でいふ。

七十八頁

イっキウチ』

スウネンワ　スギタ』　アマゴノ　ホンジョオデ　アル　イズモノ
トダジョオワ』　ソノ　コロ　モオリグンニ　カコマレテ　イタ』
シカノスケウ　タタカつテ　シバシバ　テガラオ　タテタ』　カレノ
ユウメエワ』　ミカタノミカ　モオ　テキガタニモ　シレワタつテ　イタ』
テキガタニ　シナガワ　ダイゼント　ユウ　アラムシャガ　イタ』　カレワ
シカノスケオ　ヨキ　アイテト　ツケネラつタ』　ナオ　タラギ
オオカミノスケ　カツモリト　アラタメ』　オリモ　アラバ　シカノスケオ
ウチトロオト　オモつタ』『』
アルヒノ　コト』　シカノスケワ　ブカオ　ツレテ　ジョオガイオ　ミマワつテ

七十九頁

イタ』　カワオ　ヘダテタ　タイガンカラ　シカノスケノ　スガタオ　チラト
ミタ　オオカミノスケワ　ワレガネノ　ヨオナ　コエデ　サケンダ』
ヤア」　ソレナル　アカイトオドシノ　ヨロイワ　アマゴガタノ　タイショオト
ミタ』　シカノ　ツノニ　ミカズキノ　マエダテワ　マサシク　ヤマナカ
シカノスケデ　アロオ』
シカノスケワ　リント　シタ　コエデ　ダイオンニ　コタエタ』
イカニモ　ヤマナカ　シカノスケ　ユキモリデ　アル』
オオカミノスケワ　ヨロコンデ　オドリアガッタ』
カク　ユウワ　イワミノ　クニノ　ジュウニン　タラギ　オオカミノスケ
カツモリ』　サア　イっキウチノ　ショオブオ　イタソオ』　アノ　カワシモノ
スコソ　ヨキ　パショ>ト　イイナガラ」　ユミヲ　コワキニ　ハサンデ

八十頁

ザンブト　ミズニ　トビコンダ』　シカノスケモ　タダ　ヒトリ　ナガレオ
キっテ　ススンダ』
オオカミノスケワ　ユミニ　ヤオ　ツガエテ　シカノスケオ　ネラっタ』
アマゴガタノ　アキアゲ　イオリノスケガ　ソレオ　ミテ」　イっキウチニ
トビドオグトワ　ヒキョオ　センバン>ト」　コレモ　テバヤク　ヤオ
ツガエテ　ヒョオト　イル』　ネライ　タガワズ」　オオカミノスケガ
マンゲツノ　ゴトク　ヒキシボっテ　イル　ユミノ　ツルオ　フツリト
イキっタ』　ミカタワ　ワア>ト　ハヤシタテタ』
オオカミノスケワ　イカっテ　ユミオ　カラリト　ステ」　スニ　アガルガ
ハヤイカ　シシャクノ　オオダチオ　ヌイテ　キっテ」　カカっタ　シカシ
シカノスケノ　タチカゼワ　サラニ　スルドカっタ』　イツノマニカ

オオカミノスケワ　キリタテラレテ　シダイニ　ミズギワニ　オイツメラレテ
イつタ』

八十一頁

メンドオダ』　クモオ』
コオ　サケンデ　オオカミノスケワ　タチオ　ナゲステタ』　オオオトコノ
カレワ　シカノスケオ　チカラデ　シトメヨオト　オモつタノデ　アル』
フタリワ　ムズト　クンダ』　シバラクワ　タガイニ　コキュウオ　ハカつテ
イタガ』　ヤガテ　オオカミノスケワ　マンシンノ　チカラオ　コメテ
シカノスケオ　ナゲツケヨオト　シタ』　シカノスケワ　ソレオ　ジっト
フミコタエタガ』　カタアシガ　スノ　ハシニ　スベリコンデ　オモワズ
ヨロヨロト　スル』　タチマチ　オオカミノスケノ　オオキナ　カラダガ
シカノスケノ　ウエニ　ノシカカつタ』　シカノスケワ　クミシカレタ』

八十二頁

リョオガンノ　テキモ　ミカタモ　オモワズ　テニ　アセオ　ニギル』
トタンニ　シカノスケワ　ムっクト　タチアガっタ』　ソノ　テニワ　チニ
ソマつタ　タントオガ　ヒカつテ　イル』　オオカミノスケノ　オオキナ
カラダワ　モオ　シカノスケノ　アシモトニ　グタリト　シテ　イタ』
テギモ　ミヨ　ミカタモ　キケ』　アラワレデタ　オオカミオ　シカノスケガ
ウテトつタ』

シカノスケノ　ダイオンジョオワ　リョオガンニ　ヒビキワタつタ』
ソノゴ　イクタビカ　ハゲシイ　タタカイガ　アつタ』　サシモノ　テキモ
コノ　イチジョオオ　モテアマシタガ』　ゼンゴ　シチネンニ　ワタル　ナガイ
ロオジョオニ　アマゴガタワ　オオク　センシシ』　ソレニ　リョオショクガ
トオトオ　ツキテ　シマつタ』　ジョオシュ　アマゴ　ヨシヒサワ　ナミダオ

八十三頁

ノンデ　テキニ　クダつタ」トダジョオニワ　モオリノ　ハタガ
ヒルガエつタ』

〔甲〕『毛利軍』モオリダン、『軍』を獨立の單語の如く考へてグンと「グ」音（鼻音でない音）を以て言つてもよい。カコマレテ　イタ、又は續けてカコマレテイタ。ユウメエ、又はユウメエ。ヤア、アクセント不定。此處は「ヤ」を高い調子で言つてよい。『石見の國』イワミノ　クニ、又はイワミノ　クニ。キつテ　カカつタ、多くは續けていひ。キつテカカつタの樣にいふ。スルドカつタ、又はスルドカつタともいふ。アラワレデタ、又はアラワレテタ。

〔乙〕『矢をつがへて、鹿介を』の間、『洲に上るが早いか、四尺の』の間は切らない方がよい。『めんだうだ。組まう』は稍速くいふとよい。『鹿介は、それをじつとふみこたへた』云々からその頁の終まで、各文の終の休止は極めて短くする。切迫した光景を表すためである。

前の一節「重代の胃」はしんみりした調子で言ひ、此の「一騎討」の一節は強い聲で

いふ。その對照を明かに附けるとよい。

クセツ

アマゴノ　キュウシンワ　ナミダノ　ウチニ　シサンシタ』シカノスケワ
ミオ　ヤツシテ　キョオトエ　ノボつタ』
センゴクノ　ヨトワ　イエ―キョオトデワ　ハナガ　サキ　ヒトワ　チョオノ
ヨオニ　ウカレテ　イタ』―』
ソノ　ウチニ　アマゴノ　キュウシンガ　オイオイ　キョオトニ　アツマつテ
キタ』カレラワ―シカノスケオ　チュウシント　シテ　シュカノ　サイコオオ
クワダテタ』
ソノ　コロ―キョオトノ　アル　テラニ　ジンピンノ　ヨイ　コゾオサンガ

八十四頁

イタ』ソオシテ　ソレガ　アマゴケノ　シソンデ　アル　コトガ　ワカつタ』

シカノスケワ　コノ　コゾオサンオ　シュクント　アオイダ』

アマゴケ　サイコオノ　コトワ　ワガ　ネンライノ　ノゾミデ　アル』

コゾオサンワ　オオシクモ　コオ　イつテ』コロモオ　ヌギステ　アマゴ

カツヒサト　ナノつタ』―

八十五頁

トキワ　キタ』エエロク　ジュウニネン　ロクガツノ　アルヨ』カツヒサオ

ホオズル　アマゴゼエワ　イズモニ　イリ』イチジョオオ　キズイテ　ミタビ

トキノコエオ　ツクつタ』

コノ　コエガ　シホオニ　ヨビカケデモ　シタ　ヨオニ』イママデ　テキニ

ツイテ　イタ　キュウシンガ　ゾクゾクト　カツヒサノ　トコロエ

アツマつタ』ショジョオワ　カタハシカラ　アマゴノ　テニ　カエつタ』

八十六頁

シカシ』トダジョオワ　メエジョオデ　アルダケニ　ナカナカ　オチソオニ

ナカつタ』

ソノ　アイダニ　モオリノ　タイグンガ　ヤつテキタ』テルモトオ

タイショオト　シ　キつカワ　モトハル　コバヤカワ　タカカゲオ

フクショオト　シテ』イチマン　ゴセンノ　セエヘエガ　ドオドオト

シングン　シテキタ』

トダジオガ　マダ　トレナイノニ　テキノ　タイグンガ　オシヨセタノデワ』

ミカタノ　ショオリガ　オボツカナイ』シカシ　シカノスケワ　ハラオ

キメタ』スベテノ　グンピョオオ　ヒキイテ　トダジョオノ　ミナミ　サンリ

フベヤマニ　テキオ　ムカエ　ウつタ』ミカタノ　グンワ　ヤク

シチセンデ　アつタ』

マコトニ　シニモノグルイノ
シバシバ　クズレタ』シカシ
テキデ　アル　アラテワ　アトカラ　アトカラ　アラワレル』サシモノ
アマゴゼエモ　ヘトヘトニ　ツカレ　オオクノ　ユウシワ　ムザンヤ
マクラオ　ナラベテ　ウチジニ　シタ』
カチホコつタ　テキノ　タイグンワ　ヤガテ　イズモ　イつコクニ
アフレタ』カツヒサワ　アヤウク　ノガレテ　フタタビ　キョオトエ
ハシつタ』

〔甲〕ウカレテ　イタ、又は續けてウカレテイタ。ナノつタ、又は平板式にもいふ。『永祿エエロク(平)、又はエエロク。

〔乙〕『或時に、人品の』の間は切らない方がよい。

コオズキジョオ』

ソレカラ　マタ　イクネンカ　スギタ』シカノスケワ　オダ　ノブナガニ
モオリゼメノ　ココロザシガ　アル　コトオ　シつテ』カレオ　タヨつタ』
シカノスケオ　ヒトメ　ミタ　ノブナガワ　コノ　ユウシノ　クセツニ
ドオジョオシタ』
モオリゼメノ　オンサキテニ　クワワリ』モシ　センコオガ　アリマシタラ』
シュジン　カツヒサニ　イズモ　イつコクオ　イタダキトオ　ゴザイマス』
シカノスケノ　チオ　ハク　コトバニ』ノブナガワ　オオキク　ウナズイテ
ミセタ』
ツイニ　フタタビ　トキガ　キタ』アマゴノ　ザントオワ　ヒデヨシノ

八十八頁

グンゼエニ　クワワつテ　モオリゼメノ　センポオト　ナつタ』
イチハヤク　ハリマノ　コオズキジョオオ　センリョオシテ　ココニ
タテコモつタ　ニセン　ゴヒャクノ　アマゴゼエワ　ホドナク　モトハル
タカカゲノ　ヒキイル　シチマンノ　タイグンニ　ヒシヒシト
トリカコマレタ』
ヒデヨシノ　エングンガ　キョオ　クルカ　アス　クルカ』　ソレオ　タノミニ
カツヒサワ　シロオ　マモつタ』　モオリガタノ　タイホオオ　ヨニ
ジョオジテ　ウバイトつテ　ミカタワ　イチジ　キセエオ　アゲタ』
シカシ　エングンワ　テキニ　ハバマレテ　チカズク　コトガ
デキナカつタ』　シチマンノ　タイグンニ　カコマレテワ　コオズキジョオワ
ヒトタマリモ　ナイ』　ユミ　オレ　ヤ　ツキテ』　カツヒサワ　イサギヨク

八十九頁

セつプクスル　コトニ　ナつタ』
イタズラニ　クチハテタカモ　シレヌ　ワタシガ　イズモニ　ハタアゲ
シテ』　イチジデモ　ソノ　リョオシュト　ナつタノワ　マつタク　オマエノ
チカラデ　アつタ』
カツヒサワ　コオ　イつテ　シカノスケニ　カンシャシタ』
シカノスケワ　オトコナキニ　ナイテ　シュクンニ　オワビオ　シタ』　シカシ
カレワ　マダ　シネナカつタ』　アマゴ　ジュウダイノ　テキ　モオリオ』
セメテ　ソノ　カタワレノ　モトハルオ』　オノレ　ソノママニ　シテ
オケヨオカ』　シチナン　ハつクワ　モトヨリ　ノゾム　トコロデ　アル』
シカノスケワ　シュクンニ　ココロザシオ　ツゲ』　ユルシオ　コオテ　ワザト
トラワレノ　ミト　ナつタ』

［甲］ヒシヒシト、「ヒ」「シ」「ヒ」各音節に母音無聲化を起さない様にいふ方がよい。ユミ△オレ、多くは續けてユミオレといふ。

［乙］『重代の敵毛利を』の次で切ること勿論である。もし切らないと「毛利を攻めて」の様な意味に聞える恐がある。『おのれ其のまゝにして』は力強くいふべきこと勿論であらう。

九十頁

コオベガワノ　アキ』

シカノスケワ　ニシエ　オクラレタ』

ココワ　ビつチュウノ　クニ　コオベガワノ　ワタシデ　アル』　テンショオ

ロクネン　シチガツ　ジュウシチニチ」　アキトワ　イエ　マダ　ハゲシイ

ニつコオガ　ジリジリト　テリツケテ　イル』

カワバタノ　イシニ　コシカケテ」　コシカタ　ユクスエオ　オモイナガラ」

九十一頁

シカノスケワ　ジつト　ミズノ　オモテオ　ナガメタ』

ツバメガ　カワミズニ　スレスレニ　トンデワ　シロイ　ハラオ　ミセテ

チュウガエリオ　シテ　イタ』

トツゼン　ウシロカラ　キリツケタ　モノガ　アル』　シカノスケワ　ソレガ

テキガタノ　ヒトリ　カワムラ　シンザエモンデ　アルト　シルヤ」　ミオ

カワシテ　サンブト　カワエ　トビコンダ』　シンザエモンモ　トビコンダ』

フタリワ　シバシ　スイチュウデ　タタカつタガ」　オモデオ　オイナガラモ

シカノスケワ　タイリキノ　シンザエモンオ　クミフセテ　シマつタ』　スルト

コレモ　チカラジマンノ　フクマ　ヒコエモンガ　ウシロカラ　シカノスケノ

モトドリオ　ツカンデ　ヒキタオシタ』

シチナン　ハつクノ　ショオガイワ　サンジュウ　シサイデ　オワリオ

ツゲタ』コオベガワノ　ミズワ
ユウユウト　ナガレテ　イル」ツキゴトニ　アノ　アワイ　ミカズキノ
カゲオ　ウカベナガラ』

〔甲〕『新左衞門』シンザエモンといふことが多い。又はシンザエモンといふこともあるが是等は其の當人自身の習慣によつて定めるより外にない。オイナガラモ、又はオイナガラモ。ヒコエモン、又はヒコエモン。モトドリ、又は平板式。

〔乙〕此の一節の始め半分は前諸節とちがひ、靜かな調子で云ふ。唯『とつぜん』以下は再び強い調子でいひ、最後の三行は又靜かにいふのが良い。

九十二頁

ダイ　ジュウシチ』トショカン』

シチガツニ　ナつテ」ヨルノ　ソラニ　ホシガ　ウツクシク　ミエル　ヨオニ

ナつタ』ボクワ　コノアイダカラ　ホシノ　コトオ　シリタイト　オモつテ」
チチノ　ホンバコオ　ミタガ　ホシノ　ホンワ　イつサツモ　ナイ』
トショカンエ　イケバ　イクラモ　アルダロオント　チチワ　イつタ』」
キョオワ　ニチヨオビナノデ」ボクワ　アサカラ　トショカンエ　デカケタ』
ソノ　オオキナ　タテモノガ　ミエルト」ボクワ　アツイノモ　ワスレテ
イソギアシニ　ナつタ』
イリグチデ　エツランヨオシオ　モラウ』モクロクシツエ　ハイルト
キュウニ　アセガ　ナガレダシタ』
モクロクワ　タクサンノ　ハコニ　ハイつタ　カアドデ　アル』ミンナガ
ソレオ　シラベテワ　ヨオシニ　カキイレテ　イル」シカシ」アマリ
カアドガ　オオイノデ　ボクワ　ドレオ　ミテ　ヨイカニ　マヨつタ』

九十三頁

九十四頁

スルト　カカリノ　ヒトガ　ソバエ　キテ
ドンナ　ホンガ　ヨミタイノデスカ>ト　イッタ』
ホシノ　ホンデス』
アア」　ソレナラ　テンモンガクト　ユウ　ミダシノ　アル　トコロオ
ミルノデス』
コオ　イッテ　カカリノ　ヒトワ　ソノ　カアドオ　オシエテ　クレタ』
ボクワ　ウレシカッタ』
シカシ　テンモンガクノ　カアドモ　ズイブン　オオイ』　ソコデ　ボクワ
マタ　マヨッタ』　スルト」
コレガ　ヨイデショオ>ト　イチマイノ　カアドオ　サシテ　ソノ　ヒトワ
イッタ』　ドコマデモ　シンセツナ　ヒトダ』

九十五頁

アリガトオ　ゴザイマス>ト　オレエオ　イッテ」　ボクワ　ソノ　カアドノ
ホンノ　ナト　バンゴオオ　ヨオシニ　カキコンダ」　ソレオ
スイトオガカリエ　モッテ　イクト」　スグ　ショコエ　オクラレル』　マモナク
スイトオシュガ　タクサンノ　ホンオ　カカエテ　ショコカラ　デテキタ』
スイトオガカリノ　ヒトガ　イチイチ　セエメエオ　ヨンデワ　ホンオ
ワタス』　キュウニ　ナカムラサン>ト　ボクノ　ナガ　ヨバレタ』　ハット
シナガラ　オモワズ　ハイ>ト　オオキナ　コエデ　ヘンジオ　シタノデ」
スイトオガカリノ　ヒトワ　ワライナガラ　ホンオ　ワタシテ　クレタ』」

九十六頁

エツランシツエ　イッタ』
テンジョオノ　タカイ　ヒロビロト　シタ　シツワ」　シント　シテ
シズカダ』　シカモ　ナカニワ　オオゼエノ　ヒトガ　イテ　ネッシンニ

九十七頁

ホンオ ミテ イル』 ボクモ デキルダケ オトオ タテナイ ヨオニ
イッテ』 アイテ イル セキニ コシカケタ』
マモナク』 ボクノ ココロワ ホンノ ナカノ ツキヤ ホシノ
ウツクシイ セカイエ トンデイッタ』 ドレダケノ ジカンガ タツタロオ』
スコシ ツカレタノデ アタマオ アゲテ ミマワスト イママデ
スコシモ キガ ツカナイデ イタガ マツモトクンガ ズット ムコオノ
セキニ イル』 ソット イッテ カルク セナカオ タタク』
マツモトクンワ ビックリ シテ ボクオ ミアゲタ』 マツモトクンワ
レキシモノガタリオ ヨンデ イタ』
フタリデ キュウケエシツエ イッタ』
キミ ハジメテ キタネ』

九十八頁

ウン』
ボクワ ドヨオカ ニチヨオニワ タイテエ キテ イル』 ヨミタイ
ホンガ ヤマホド アルヨ』 キミモ コレカラ タビタビ クルト イイ』
ナツヤスミニ』 ナッタラ ボクモ キット クル』
マドノ ソトニワ カエデノ エダガ ソヨカゼニ ウゴイテ イル』
ソオシテ』 マブシイ ホド テリツケル ヒオ アビテ』 ヒマワリヤ
ホオセンカヤ マツバボタンノ ウツクシク サイテ イルノガ ソノ
エダゴシノ ニワニ ミラレタ』

〔甲〕『用紙』ヨオシ、又は平板式にもいふ。アア、アクセント不定、こゝは始めのアを高くいつてよい。ドコマデモ、又はドコマデモ。ジカン、又は平板式。『土曜』ドヨオ、又は平板式。

九十九頁

［乙］『たくさんの箱にはいつたカード』の「カード」を稍強める。『又迷つた』の「又」を強める。『しかも』は恐らく「所が」「しかし」等の意味であらうが、いかに朗讀すべきかの問題にならない。『君始めて來たね』『來たのは今が始めてなんだね』の心であらうが、少くとも東京語を使ふ人は斯ういふ意味で「始めて來たね」といふ言葉は意味不明である。『始めて來たのだらう。從つて朗讀法の問題にならない。何の方言かわかつたならば其の地方の方言的アクセント及び調子でいふべきであらう。

ダイ　ジュウハチ』　ホシノ　ハナシ』

ハレタ　ヨル　ソラオ　アオグト　タクサンノ　ホシガ　マルデ
ホオセキオ　チリバメタ　ヨオニ　ウツクシク　カガヤイテ　イマス』
チョつト　ミタ　トコロデワ　ホトンド　ムスウト　ミエル　コレラノ

ホシニモ　ナマエヤ　バンゴオガ　アリ　イチモ　キマつテ　イルノデスガ』
タダ　ボンヤリ　ミテ　イル　ダケデワ　イつタイ　ドレガ　ドオナノカ
サつパリ　ケントオガ　ツキマセン』』

ソコデ　マズ　マキタエ　ムカつテ　タつテ　ミマショオ』　キタノ　ソラニモ
タクサンノ　ホシガ　アリマスガ』　ソノ　ナカデ　ヒトツ　ダイジナ
ホシガ　アリマス』　チヘエセンカラ　シダイニ　ミアゲテ　アタマノ
マウエマデ　イク　トチュウ』　マンナカヘンヨリ　スコシ　ヒクイ　トコロニ
カナリ　オオキナ　ホシガ　ヒトツ　ミエルノガ　ソレデス』　モつトモ
ソノ　タカサワ　ミル　バショニ　ヨつテ　イクブン　チガイマス』　キタノ
ホつカイドオデシタラ　ホボ　マンナカヘンデスガ』　ハンタイニ　ミナミノ
オキナワヤ　タイワンデシタラ　ズつト　ヒク　ナリマス』

百一頁

シカシ コオ イつタ ダケデワ マダ ナカナカ ケントオガ
ツカナイデショオ ソオシタラ ドコカ ソノヘンノ ソラニ ヒシャクノ
ヨオナ カタチニ ツラナつタ ウツクシイ ナナツノ ホシオ サガス
コトニ シマショオ コレワ スグ ミツカリマス シチガツノ
チュウジュンデスト ヨル クジゴロ キタヨリ スコシ ニシエ ヨつタ
ホオニ マスオ シタニ スコシ マガつタ エオ ウエニ チョオド
ヒシャクオ タテタ ヨオナ カつコオニ ナつテ イマス コノ ナナツノ
ホシオ ホクト シチセエト イイマス
ホクト シチセエガ ミツカつタラ ソノ ナナツノ ナカノ シタノ
ハシニ アタル フタツノ ホシニ チュウイ シマショオ ソオシテ
カリニ コノ フタツノ ホシオ ムスブ センオ ヒキ ノレオ ナオ

百二頁

ミギノ ホオエ ノバシテ ミマショオ スルト コノ フタツノ ホシノ
キョリノ ゴバイバカリノ トコロニ キつト ヒトツノ ホシガ
ミツカリマス サつキ サガソオト シタノガ コレデ ホつキョクセエト
ユウ ホシデス ホつキョクセエワ イツ ミテモ ホボ マキタニ アル
ホシデスカラ ヨル ミチニ マヨつタ トキナド コノ ホシオ
ミツケレバ スグ ホオガクオ シルト コトガ デキマス ムカシカラ
コオカイノ メアテト ナつテ クレタノワ コノ ホシデス

百三頁

トコロデ オオゾラノ ホカノ ホシワ ジコクニ ヨつテ カナリ
アリバショガ カワつテ イキマス イマ ドレカ ヒトツノ ホシオ
ヒガシニ サシデタ ノキバニ スレスレニ アテテ シタカラ ジつト
ミテ イマスト ヤガテ ソノ ホシワ ノキバニ カクレテ ミエナク

百四頁

ナリマス』ツマリ　ホシワ　ニシエ　ニシエ　ウツつテ　イクノデス』ヒヤ
ツキガ　ヒガシカラ　デテ　ニシエ　ハイル　ヨオニ』ホシモ　ダイタイ
ヒガシカラ　デテ　ニシエ　ハイルノデス』
ホシノ　ウゴキカタオ　モつト　クワシク　シラベテ　ミマスト』キタノ
ソラデワ　ホシガ　ホつキョクセエオ　ホボ　チュウシンニ　エンオ
エガイテ　ウゴイテ　イルノダト　ユウ　コトガ　ワカリマス』
シャシンキオ　ホつキョクセエニ　ムケテ　イチジカングライ　フタオ
アケテ　オクト』コノ　エンオ　エガク　ヨオスガ　ワカル　ヨオニ
シャシンニ　ウツリマス』ソレデ　ナクテモ』ヨル　クジニ　ホクト
シチセエオ　ミテ　ソノ　イチオ　オボエ』サラニ　ジュウジ
ジュウイチジニ　ミルト』コノ　ウゴキカタガ　タイテエ　ケントオガ

百五頁

ツキマス』ソオシテ　ホつキョクセエノ　チカクニ　ミエル　ホシホド
チイサイ　エンオ　エガキマス』
エガキマス』
シカシ』コオユウ　フウニ　ホシガ　ウゴクト　ユウノモ　ジツワ
ワレワレノ　スンデ　イル　チキュウガ　マワルカラ　ソオ　ミエル　ダケノ
コトデスガ』イマノ　バアイ　ソレオ　カンガエニ　イレナイデ
オキマショオ』』
サテ』コノ　ホつキョクセエヤ　ホクト　シチセエオ　メアテニ　シテ　ソノ
フキンオ　ミルト』イロイロノ　ホシノ　レツガ　アリマス』マズ　ホクト
シチセエト　ソノ　フキンニ　アル　イクツカノ　ホシオ　クワエテ
オオグマザト　イイマスガ』ソレワ　ムカシノ　ヒトガ　ソレラノ　ホシノ

レツニ　オオキナ　クマノ　カタチオ　カンガエタカラデス』　マタ
ホつキョクセエオ　エノ　ハシニ　シテ」　ホクト　シチセエト　ドオヤラ
ニタ　チイサイ　ヒシャクガタニ　ツラナルノオ」　オオグマザニ　タイシテ
コグマザト　イイ」　コグマザト　ホクト　シチセエトノ　アイダニ　オオ
イレテ　コグマザオ　ツツム　ヨオニ　ノロノロト　マガリクネつテ
ツラナル　トオバカリノ　ホシオ　リョオザト　イイマスガ」　ドチラモ
ホシガ　アマリ　オオキク　アリマセンカラ　ヨク　キオ　ツケテ　ミナイト
ハつキリ　シマセン』　ソレヨリモ」　ホつキョクセエノ　ミギシタノ　ホオニ
イスノ　カタチニ　ツラナル　イツツバカリノ　ホシワ　カシオペイアザデ」
ゾクニ　イカリボシトモ　ヤマガタボシトモ　イイマスガ」　コレワ　ハつキリ
シテ　イマスカラ　ダレデモ　スグ　ミツケマス』　ソオシテ」　コノヘン

百六頁

キタカラ　ミナミエ　カケテ　アマノガワガ　ナツノ　ヨゾラニ　ギンノ
スナゴオ　ウツクシク　マキチラシテ　イルノガ　ミラレマス』

〔甲〕　マキタ「眞北」はマつキタともいふ。タカサワ、又は平板式。ソノヘンノ、又は平板式。『あり場所』アリバショ、又はアリバショ。龍座、アクセント不確。カシオペイア、これが原語（英語 Cassiopeia）のアクセントに近い。

〔乙〕　此の課には斷續に注意すべき所が多い。その數例を擧げると、點があつても切らない方がよい例

晴れた夜、空を仰ぐと
ちよつと見たところでは、ほとんど無數
もつとも（こゝで切る）其の高さは、見る場所によつて　等

『北の北海道』これを餘り續けて言ひ過ぎるか又は「北の」を強め過ぎると、「北海道が二つあつて、その中北に在る方のもの」といふ意味に聞える恐がある。此の原文の意味を表現するためには『北の』を餘り強めないこと、及び『北の』の次で一寸切る

ことが必要である。次の南の沖縄云々も同じ。

『のろ〳〵と』は『によろ〳〵と』の意味のつもりであらう。『のろ〳〵』は運動の緩漫なる形容である。によろ〳〵の意味に使ふことは無い。

百七頁

ダイ　ジュウク』　ケエジョオエ』

レンラクセンワ　アサ　ハヤク　フサンニ　ツイタ』　ケエジョオユキノ
キシャガ　メノマエニ　マつテ　イル』　アニト　ワタクシワ　ナランデ
セキオ。トつタ』　マエノ　セキニワ　チョオセンフクオ　キタ　ヒトガ
コシカケタ』　ソオシテ」
ドチラエ　イラつシャイマスカ〉ト・　ワタクシタチニ　ハナシカケタ
ケエジョオエ　マイリマス』　アナタワ』

百八頁

ワタクシワ　ケエジョオデ　ノリカエテ　ゲンザンエ　マイリマス』
アニワ　ソノ　ヒトト　サつソク　ナカヨシニ　ナつテ　ハナシアつテ　イル』
モラつタ　メエシニワ　キンシュンタイト　アつタ』」
エンドオノ　ケシキワ　ナイチトワ　ダイブ(ン)　カワつテ　イル』　チカクノ
ヤマヤマワ　オカト　イイタイ　ホド　ヒク　ナダラカデ　アル』　ナラヤ
クヌギオ　マジエタ　マツバヤシガ　ドコマデモ　ツズク』　シタクサノ
シゲリワ　アマリ　フカク　ナイノデ」　トコロドコロニ　ジメンノ　アカイ
イロサエ　アラワレテ　イル』　イタル　トコロ　スイデンガ　ヨク
ヒラケテ　イネガ　アオアオト　ノビテ　イル』　ソノ　アイダオ　キシャワ
スサマジイ　イキオイデ　ハシル』
ヤマノ　フモトヤ　コダカイ　オカノ　ソバニ　ムラガ　ミエル』　イエワ

百十頁

ミンナ　ワラブキデ　チイサイ』　ヒョロヒョロト　ノビタ　ポプラノ　シタノ
イつケンヤ」　カキネニ　カケタ　シロイ　ホシモノ　アカイ　ツチノ
イロナドオ　ミルト」　ナルホド　チョオセンダナト　ユウ　カンジガ　スル』
タイキュウオ　スギテ　シバラク　イクト　シダイニ　ノボリニ　ナル』
シュウフウレエオ　コエルノデス』　ウルサンカラ　ケエジョオエ　ムカウ
リョカクキワ　ココガ　イチバン　ナンジョダ　ソオデス』
キンサンガ　セツメエシテ　クレル』
コノ　レつシャワ　トクベツキュウコオデ　トチュウノ　エキニワ
ホトンド　トマラナイ』　エキメエオ　ヨム　ヒマモ　ナク　トオリスギテ
シマウ』　エキインノ　カオガ　ミエタト　オモウト　キエ」　エキノ
カダンノ　アカイ　カンナノ　ハナガ　ウシロエ　ハシつテ　イク』

百十一頁

モオ　ヒルチカイ　コロデ　アロオ』　タイデンオ　スギタ』　ツヨイ
タイヨオノ　ヒカリガ　ヤマニ　ハタケニ　ギラギラト　テリツケテ　イル』
シャナイモ　ナカナカ　アツイ」　マドオ　アケハナシテ　カゼオ　イレル』
アサノ　キモノオ　キタ　ヒトガ　アブラガミノ　オオギオ　ユつタリ
ツカつテ　イル』
ヒロイ　ドオロガ　テツドオト　ナランデ　トオつテ　イル　トコロガ
オオイ』　ナミキガ　ヨク　ウエコマレテ　イル』　ニモツオ　ツンダ
チイサイ　チョオセンマガ　イク』　ナミキノ　ヒカゲニ　オオキイ
ツツミオ　アタマノ　ウエニ　ノセタ　オンナガ　ヤスンデ　アセオ　フイテ
イル』　トキニワ　スナボコリオ　アゲテ　ジドオシャモ　ハシル』
リョコオアンナイオ　ミテイタ　アニガ

百十二頁

イマ　スギタ　エキワ　セエカンダヨ』メエジ　ニジュウ　シチハチネン
センエキノ　コセンジョオダ』
ソオデス』マツザキ　タイイノ　ヒモ　アル　ハズデス』
キンサンノ　ユビサス　ホオオ　タチアガつテ　ミタラ』オカノ
アオバガクレニ　ソレラシイ　モノガ　ミエタ』

スイゲンオ　スギル』
ミワタス　カギリ　スイデンガ　ツズイテ』アオアオト　シタ　イネガ
イキオイヨク　ノビテ　イル』アツイ　ヒザカリニ　アつチデモ　コつチデモ
タノ　クサオ　トつテ　イル』クサトリノ　テオ　ヤメテ　コつチオ　ミテ
イル　コドモモ　アル』モオ　ケエジョオデスヨ』イマ　トオつタ
エエトオホカラ　ヨつツメガ　ケエジョオエキデス』

百十三頁

モオ　ケエジョオデスカ』フサンカラ　ヨンヒャク　ゴジつキロメエトルオ
シチジカンモ　カカラナイデ　ハシつタ　ワケデスネ』
ソオデス』

デワ　オワカレデスネ』イロイロ　オセワニ　ナリマシタ』
アニト　キンサンガ　ハナシアつテ　イル』
キシャワ　スサマジイ　オトオ、タテテ　カンコオノ　テつキョオオ
ワタつタ』コオガンノ　タテモノガ　ツヨイ　ナツノ　ヒカリオ　ウケテ
キラキラト　ヒカつテ　イル』キシャワ　モオ　ケエジョオノ　シチュウオ
ハシつテ　イルノダ』イエイエノ　アイダオ』

〔甲〕ドコマデモ、又はドコマデモ。（本書巻八、一〇頁参照）ホシモノ、又はホシモノ。大田、アクセント不確、平板式か又はタイデンであらう。油紙、アブラカミと「カ」を

清音にいふのが東京の慣習である。

［乙］『あなたは』の終は尻上りの調子。『山のふもとや、小高い』の間は切らない方がよい。『あつちでも、こつちでも』（百十二頁四行）の間も切らない。『もう京城ですよ』は「京城」を強める。次の『もう京城ですか』は「もう」を強める。此の對照を明かに區別しなければならない。『七時間』を強める。『わけですね』『お別れですね』の終は一ぺん上つて直下る調子。

百十四頁

ダイ ニジュウ ボクノ コンマ

ホクトワ ボクノ コンマデス――

ンマレタノワ キョネンノ ハル チョオド サクラノ ハナノ サク

コロデシタ ボクガ ガつコオカラ カエルト チチワ ニコニコ

シナガラ

百十五頁

シンイチ コンマガ ンマレタヨート イイマス ソレオ キクト ボクワ

ムチュウニ ナつテ ンマヤエ カケコミマシタ ミレバ ウスグラク

シテ アル ンマヤノ オクノ ホオデ ハハンマガ ンマレタ バカリノ

コンマオ シキリニ ナメテ ヤつテ イマシタ チチモ アトカラ

キタノデ ボクガ

オトオサン コンマワ オスデスカ メスデスカート タズネマスト チチワ

サモ トクイソオニ

オスサ>ト イイマス

ジャア コンドノ コンマワ ボクニ セワオ サセテ クダサイ

チチワ シバラク ダマつテ イマシタガ

ウン オジイサンニ ヨク サシズ シテ イタダイテ ヒトツ

百十六頁

イっショオケンメエニ　ヤつテ　ミルカ>ト　ユルシテ　クレマシタ』
ボクワ　ウレシクテ　タマリマセン』　サつソク　ソノ　コトオ　ソフニ
イイマスト」　ソフモ」
ホオ　オマエガ　セワオ　シヨオト　ユウノカ』　ヨカロオ」　ヒトツ　ヤつテ
ゴラン』　コマカイ　コトワ　ダンダンニ　ハナシテ　ア　ヨオガ」
ダイイチワ　ンマオ　ヨク　カワイガつテ　ヤル　コトダ』　ニつポンノ
ンマワ　キガ　アライトカ　イワレル　ソオダガ」　ソレモ　ンマガ
ワルイノデワ　ナイ」　アツカウ　ヒトガ　イケナイカラ　ンマニ　ワルイ
クセガ　ツイテ　シマウノダ』　シンセツニ　シテ　ヤレバ　ンマホド
スナオデ　リコオナ　モノワ　メつタニ　ナイゾ>ト　オシエテ
クレマシタ』」

百十七頁

百十八頁

コンマノ　ナワ　ホクトト　キマリマシタ」　イつシュウカンバカリ　タつテ
オヤコトモ　ンマヤノ　ソトエ　ダシマスト」　ホクトワ　オクビョオソオナ
メツキオ　シテ　ハジメテ　ミル　セカイオ　サモ　メズラシソオニ
ナガメマシタ』　オオキナ　イヌグライノ　オオキサデ」　アシワ　バカニ
ヒョロナガク　ミエマス』　ソオシテ」　トモ　スルト　ハハンマニ
スリヨつテワ　チチオ　スつテバカリ　イマス』　ソノ　カワイイ　ヨオスワ
イマデモ　ワスレマセン』
ヒガ　タツニ　ツレテ　ダンダン　ボクニ　ナレテ　キマシタ」　トキニワ
チチオ　ノムノモ　ワスレテ」　ヒョロナガイ　アシデ　ゲンキ　ヨク
クサワラノ　ウエオ　ハネマワル　コトモ　アリマシタ』
ロクガツニ　ナルト」　ハハンマニ　ツケテ　チカクノ　ボクジョオエ

百二十頁

イヨイヨ　ホクト　ホクホク　ヤレヤレ　ホクソエム　ヤレヤレ　ホクソエム　ヤレヤレ　ホクソエム

百二十一頁

ア|ダ|サ|ヒ|ヒ|ヤ
オ|ト|シ|ダ|ミ|ノ|ウ|オ|ス|ハ|ト|ス|ル|ヨ|ヒ|ヤ|カ|ル|ク|ル|ノ|ヲ|ヒ|ル|ヤ|ス|ム|ト|ヒ|ト|ノ|ヨ|ル|ヲ|ス|ゴ|シ|テ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ハ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ニ|ネ|ム|ル|ノ|ダ|ケ|ド|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ハ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|デ|テ|ミ|ル|ト|ソ|ト|ハ|ア|カ|ル|イ|ヒ|カ|リ|ガ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|テ|ラ|ス|ノ|ダ|ケ|ド|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ハ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|ア|カ|ル|ク|ス|ル|ノ|ダ|ケ|ド|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ハ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|ア|カ|ル|ク|ス|ル|ノ|ダ|ケ|ド

百二十二頁

ア|ダ|サ|ヒ|ヒ|ヤ
オ|ト|シ|ダ|ミ|ノ|ウ|オ|ス|ハ|ト|ス|ル|ヨ|ヒ|ヤ|カ|ル|ク|ル|ノ|ヲ|ヒ|ル|ヤ|ス|ム|ト|ヒ|ト|ノ|ヨ|ル|ヲ|ス|ゴ|シ|テ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ハ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ニ|ネ|ム|ル|ノ|ダ|ケ|ド|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ハ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|デ|テ|ミ|ル|ト|ソ|ト|ハ|ア|カ|ル|イ|ヒ|カ|リ|ガ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|テ|ラ|ス|ノ|ダ|ケ|ド|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ハ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|ア|カ|ル|ク|ス|ル|ノ|ダ|ケ|ド

百二十一頁

ト|ン|デ|キ|テ|ハ|ン|ノ|ウ|ヘ|ニ|ノ|セ|ル|ト|ス|グ|ニ|ト|ビ|ダ|ス|ノ|デ|ス|ガ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ハ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|ア|ケ|テ|ミ|ル|ト|ソ|ト|ハ|ア|カ|ル|イ|ヒ|カ|リ|ガ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|テ|ラ|ス|ノ|ダ|ケ|ド|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ハ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|ア|カ|ル|ク|ス|ル|ノ|ダ|ケ|ド

百二十二頁

ト|ン|デ|キ|テ|ハ|ン|ノ|ウ|ヘ|ニ|ノ|セ|ル|ト|ス|グ|ニ|ト|ビ|ダ|ス|ノ|デ|ス|ガ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ハ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|ア|ケ|テ|ミ|ル|ト|ソ|ト|ハ|ア|カ|ル|イ|ヒ|カ|リ|ガ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|テ|ラ|ス|ノ|ダ|ケ|ド|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ハ|ヒ|ト|リ|ボ|ク|ノ|ヘ|ヤ|ヲ|ア|カ|ル|ク|ス|ル|ノ|ダ|ケ|ド

百二十三頁

ニサイゴマノ　イチガ　ハジマレバ　イヨイヨ　ホクトト　ワカレナケレバ
ナリマセン』　イチネン　ハンモ　テシオニ　カケタ　ホクトト　イっショニ
イルノモ　アト　イクニチモ　ナイト　オモウト」　ボクワ　ナキタイ　ホド
ツライ　キガ　シマス』　ケレドモ　ホクトワ　キっト　グンバニ
カイアゲラレルニ　チガイ　アリマセン』　ソオシテ」　リっパナ
ジョオバニ　ナリ　グンジンサンオ　ノセテ　イキ　ヨオヨオト
アルクデショオ』　ソノ　イサマシイ　ヨオスオ　オモイウカベルト」　ボクワ
ホクトノ　タメニ　ヨロコンデ　ヤリタイノデス』

［甲］

ホクト、又は平板式にいつてもよいが、有聲にいふ方がはつきりして良い。ソノ　コトオ、又は續けてソノコトオ。アライトカ、又はアライトカといふこともある。イナイトキワ、又は續けてイナイトキ

ワといふ。

［乙］

ホオホオ(百二十二頁二行)、アクセント不定。

『子馬が生れたよ』の終は尻上りの調子。『見れば』の次で必ず切ること。『牡ですか牝ですか』の終は尻上りの調子でいふのがよいが、此處は「牡」「牝」をそれぞれ強めるので、調子は餘り著しく聞えないことになるであらう。

『僕に世話を』の「僕」を強める。『やつて見るか』の終は尻下りの調子でなければならない。祖父の言葉の中、『お前が』を強める。『いふのか』の終は尻下りの調子。『かはいがつて』を強める。『馬が』『使ふ人が』を強める。『馬程』を強める。『ないぞ』の終は尻上りの調子。『すり寄つては、乳を』の間を切らない方がよい。『學校から歸ると、すぐ』の間は切つてはいけない。『其の頃學校から歸ると』を續けて、その終で切ると、「其の頃歸る」といふ意味に聞えるからである。『ほんたうに』(百二十二頁九行)を強める。『泣きたい程』を強める。最後の『僕は北斗のために喜んでやりたいのです』を稍弱い沈んだ調子でいふと、「實は悲しい」心持がよく表れるであらう。

ダイ ニジュウ イチ』 ハハンマ コンマ』

百二十四頁

ハハンマ コンマ」 ヌマノ キシ」 ナツノ ユウベノ ヤナギカゲ』

百二十五頁

ハハガ バン シテ」 コノ ンマワ ユつクリ ユつクリ ミズオ ノム』

マルク ヒロガル ミズノ ワガ イクツモ デテワ キエル タビ」

ミズニ ウツつタ ミカズキガ ユラユラ ミエタリ カクレタリ』

百二十六頁

ハハンマ コンマ ヌマノ キシ」 ヤナギノ カゲガ クレテ イク』

〔甲〕〔乙〕 ウツつタ、「ッ」に母音無聲化を起し易い。その時はウツつタとなる。

此の課は靜かにおだやかに言ふのがよい。『番して』の終の切れ目を『子の馬は』の終の切れ目（若し切るならば）よりも稍長く切るといふ變化を考へるとよい。『消えるたび』の終の切れ目も餘り長く切らず、次の『水に』へすぐ移る方がよい。此の様に各行の終り、各節の終の切れ目の長短に變化を附けることを工夫して、單調に陷らぬ様にすべきである。

ダイ ニジュウ ニ』 アキノ オトズレ』

百二十七頁

アキワ ムシノ コエカラ ハジマル』

ヒルマワ」 マダ アツイノ タンセエガ クチオ ツイテ デテ

クル』 マナツノ アツサワ ダレモ カクゴオ シテ イルガ」 ハチガツモ

ナカバオ コセバ ドコカニ アキラシイ モノガ ミエテモ ヨサソオナ

モノデ アル』 ソレナノニ カンダンケエワ サンジュウドオ コエタガル」

アツサワ モオ タクサンダト イイタク ナル』 スルト アルヒノ ゴゴ」

ウラヤマノ モリデ ツクツクボオシ ツクツクボオシ>ノ コエオ

キイタ‖—‖

アツイ　ヒガ　ヤつト　クレテモ　ヨイノ　アイダワ　イエノ　ナカガ

ムつト　シテ　ハシラモ　カベモ　サワルト　ドオヤラ　ネつキオ　ハイテ

イル‖　ニカイエ　アガつテ　ミテモ　サシテ　スズシイ　カゼワ　ナサソオデ

アル‖　タダ　ハレタ　ヨゾラニ　ホシガ　キラキラト　サエ　ギンガガ

アザヤカニ　チュウテンニ　カカつテ　イル‖　ソノトキ　フト　ミミニ　スル

モノワ　マエノ　クサムラデ　ナク　ムシノ　コエデ　アル‖　ソレガ

ハタシテ　ナニムシデ　アルカ　ハつキリワ　シナイガ　カナリ　タスウノ

コエデ　アル　コトオ　カンズル‖　ヨガ　フケルト　オモイナシカ

ヤネガワラガ　スコシ　シメつテ　クル‖

ヨルノ　トモシビオ　シタつテ　クル　ムシワ　ガヤ　コガネムシヤ

ハアリガ　オオク　ドレモ　コレモ　タダ　ウルサイ　ダケデ　アルノニ

ドコカラカ　カスカニ　ハオトガ　シテ　ショオジニ　カルク　バサト

トマつタ　ムシガ　ヤガテ　スイつチョ　スイつチョオ　クリカエス‖

コノクライ　アイキョオノ　アル　キノキイタ　ムシワ　メつタニ　ナイ

モノダ‖　ソオシテ　ソレガ　シキリニ　アキダ　アキダ>ト　ナキタテル

ヨオニ　オモワレル‖—‖

モオ　ナント　イつテモ　アキデ　アル　ヨシ　ヒルマワ　ドンナニ

アツカロオトモ　ニつコオワ　カスカニ　キイロミオ　オビテ　カベヤ

ヘエノ　ツヨイ　ハンシャガ　イクブン　ヤワライデ　ミエル‖　コズエ

フク　カゼガ　オモイダシタ　ヨオニ　ザワザワト　オトオ　タテル‖

セドノ　ミゾバタニ　シュウカイドオガ　カワイラシイ　タンコオショクノ

ハナオ ツケル』 ハタケノ ニラノ ハナニ アタマデっカチナ
イチモジセセリガ トビチガウ ナニヨリモ タンボニ ワセノ ホガ
デソロっテ シロク ナミウツノガ アキラシク ミワタサレル』
ヤガテ ニヒャクトオカガ キテ』 ノオカワ タダ カゼバカリオ
シンパイスル』 ヨルワ ソロソロ コオロギガ イエノ ナカエ ハイっテ
ユカノ シタヤ カベノ ナカデ コエ タカク ナキタテル』

〔甲〕 カンダンケエ、又はカンダンケエといふ人もある。サシテ、又はサシテ。タスウノ、又はタスウノ。アイキョオノ、又は「ノ」の附く時平板式にもいふ。

〔乙〕 『暑さは、もうたくさんだ』の間は切つてはいけない。『たくさんだと』の「と」の前でも切つてはいけない。『たくさん』を強める。『たゞ、晴れた』の間で切る方がよい。『秋だ秋だ』は前の『スイッチョスイッチョ』と全く同じ調子でいふと良い。

百三十頁

ダイ ニジュウ サン』 ハカマダレ』

ムカシ ハカマダレト ユウ ヌスビト アリケリ』

百三十一頁

キモノオバ ハギトラントテ アルヨ マチハズレニ イデテ ヒトノ
キタルオ マチイタルニ ミブン イヤシカラザル ヒト アタタカゲナル
キモノ キテ フエオ フキナガラ アユミキタレリ』
ヨキ エモノカナ>ト タダチニ トビカカラント オモエドモ ソノ
ヒトノ アマリニ オチツキタルニ キオ ノマレテ チカヨリガタシ』
ウシロヨリ シタガイ ユケドモ ソノ ヒト スコシモ キニ トムル
ケシキ ナシ』 ワザト アシオトオ タテテ ハシリヨレバ フエオ
フキナガラ シズカニ ミカエル』 マスマス キオクレ シテ

オドリカカラン　ヨオモ　ナク　タダ　モトノ　ゴトクニ　シタガイ
ユク』―』

百三十二頁

ジつチョオホドモ　ユキテ　イヨイヨ　ココロオ　ケつシ　カタナオ　ヌキテ
キリカカレバ　コノタビワ　フエオ　フキヤメテ　フリカエリ』
ナニモノゾ>ト　ユウ』　ソノ　ヒトコエニ　ミノ　チジム　ゴトク
オボエテ』　オモワズ　チニ　ヒザマズク』　フタタビ』
ナニモノゾ>ト　トワレテ』
ヌスビトノ　タイショオ　ハカマダレ>ト　フルイナガラ　コトオ』
キキタル　コトモ　アル　ナナリ』　ワレニ　ツキテ　キタレ>ト　イイテ』
マタ　マエノ　ゴトク　フエオ　フキテ　ユク』―』
イマワ　ニグル　コトモ　カナワズ』　オソルオソル　ウシロニ　シタガイテ

百三十三頁

ソノ　イエニ　イタル』　ナニビトカト　オモエバ』　ソノコロ　ブメエ
カクレナキ　フジワラノ　ヤスマサナリ』　ヤスマサワ　イエニ　イリ』
ワタイレ　イチマイ　トリイダシテ　ハカマダレニ　アタエ』
コレオ　トリテ　ユケ』　ヨカラヌ　ワザ　シテ　ヒトオ　クルシムル　コト
ナカレ>ト　イイキカセタリ』―』
ソノノチ』　ハカマダレ　コノトキノ　コトオ　ヒトニ　カタリテ』
コレホド　オソロシカリシ　コト　ナカリキ>ト　イイタリトゾ』

〔甲〕　エモノカナ、「エモノ」をエモノの型でいふこともある。その時「カナ」の附く形はエモノカナ、又はエモノカナである。アシオトオ、又はアシオトオ。ヌキテ、「キ」に母音無聲化を起す時はヌキテといふ。ナニビト、又はナンピト（平）といつてもよい。

〔乙〕　此の文語の課も前の第四、八幡太郎等と同じく、大體口語の抑揚調子を準用してよい。

『わざと足音を立てて』を強くいひ、その次で休止を置き、『笛を吹きながら静かに見かへる』をゆつくりといふ。『いよ〳〵心を決し刀を抜きて切りかゝれば』を稍速くいふ。『此の度は』以下は再びゆつくりいふ。『何者ぞ』は強くいふ。『地にひざまづく』の次は休止を置く。再度の『何者ぞ』は前よりも一層強い聲でいふと良い。『ぬす人の大將』云々は弱い聲で「ふるひながら」の様にいふとよい。『答ふ』の次は暫く休止を置く。『聞きたることもある名なり』は半ば獨り言の様に、餘り強くなく言つてよい。『これ程』を強めることを忘れてはならない。

百三十四頁

ダイ　ニジュウ　シ　ヒザクリゲ

イチ　オダワラノ　ヤド

ヤジロオト　キタハチワ　エドオ　タつテ　トオカイドオオ　アルイタリ

カゴニ　ノつタリ　ンマニ　シナガラ　フツカメノ　ユウグレニ

百三十五頁

オダワラニ　ツキマシタ　オダワラニ　ツキマシタ

ヤドオ　トつテ　ワラジオ　ヌギ　アシオ　アラつテ　ザシキエ

トオリマシタ　マモナク　ジョチュウガ　キテ　フロノ　アンナイオ

シマシタ

キタハチ　オマエ　サキエ　ハイレ〳〵ト　ヤジロオガ　イイマシタ　ヨシ

キタト　バカリ　キタハチガ　テヌグイオ　サゲテ　フロバエ　イつテ

ミルト　イママデ　ミタ　コトモ　ナイ　ミョオナ　フロデス　ユノ　ウエニ

マルイ　イタガ　ウイテ　イマス　ソレオ　フミシズメテ　ハイルノデスガ

キタハチワ　フタダロオト　オモつテ　トリノケマシタ　ソオシテ　フロエ

カタアシオ　イレテ　ビつクリ　シマシタ　ソコワ　テツノ　カマデス

アツツツツ　コレワ　トンデモナイ　フロダ　シカシ　キクノモ

百三十六頁

メンドオダト　オモつテ　アタリオ　ミマワスト」　ニワニ　ゲタガ　イつソク
オイテ　アリマス』　コレ　サイワイト　ソノ　ゲタオ　ハイテ　フロニ
ハイリマシタ』
キタハチワ　キモチ　ヨサソオニ　ウタオ　ウタイダシマシタ』
ダガ」　ナガク　ツカつテ　イルト　ソコノ　ホオガ　アツク　ナつテ
キマシタ』　タつタリ　スワつタリ　ゲタバキノ　ママデ　ガタガタ　フンデ
イマスト」　トツゼン　ソコガ　ヌケテ　ユワ　スつカリ　ナガレデテ
シマイマシタ』
ヤア　タスケプネ』　タイヘン　タイヘン』　コノ　コエオ　キキツケテ
ヤジロオモ　ヤドノ　シュジンモ　トンデ　デテ　キマシタ』
ドオシタ　ドオシタ』

百三十七頁

ドオ　ナサイマシタ」
イヤ　イノチダケワ　ブジダガ　フロノ　ソコガ　ヌケテ』
シュジンワ　ピつクリ　シテ」
ドオシテ　マタ　ソコガ　ヌケマシタ』
ツイ　ゲタデ　ガタガタ　ヤつタノデ』
イヤ　コノ　ヒトワ　トンデモナイ　オカタダ』　ゲタバキデ　フロエ
ハイル　ヒトガ　アルモノデスカ』

〔甲〕『東海道』トオカイドオ、又はトオカイドオといふこともある。フロノ、又はフロともいふ。従つて「ソ」の附く時フロノ(平)、その他はフロガ、又はフロニ等である。ヨシ　キタ、多くは續けて「感動詞」の如くいふのでヨシキタといふ。アッツッ、「ツ」は母音を無聲化して[ts]といふ音だけを繰返してよい。

〔乙〕『北八、お前先へ』の「お前」を強める。『とんでもない』を強める。「タスケブネ」のネは多少延して長くいつてもよい。『どうして又』の「どうして」を強める。「抜けました」の終は尻下りの調子。『あるものですか』の終も尻下りの調子。

二 オオイガワ

百三十八頁

フタリワ スルガノ オオイガワマデ キマシタ キョオワ ミズガ
オオイノデ レンダイデ ナクテワ コセナイト ユウ コトデス
ヤジロオワ ニンブニ キキマシタ
イつタイ イクラデ ワタス
オフタリデ ハつピャクモン クダサイ
タカイ タカイ モオ オマエタチノ セワニ ナラヌト アシバヤニ

百三十九頁

トオリスギテ ヤジロオワ キタハチニ イイマシタ
オマエノ ワキザシオ カシテ クレ
ナンニ スルノダ
コオシテ ブシニ ナルノダ
キタハチノ ワキザシオ トつテ サシ ジブンノ ワキザシワ
サヤブクロオ ズラシテ ナガイ カタナノ ヨオニ ミセカケマシタ
ドオダ コレデ ダイショオオ サシタ リっパナ ブシニ ミエルダロオ
オマエワ オトモダ ツイテ コイ
ヤジロオワ ニンブノ オヤカタノ トコロエ イつテ ブシラシイ
コトバデ イイマシタ
ミドモワ シュヨオデ トオル モノダ カワゴシ ニンソクオ タノムゾ

カシコマリマシタ』　ゴドオゼエワ　オイクニンデ』

ナニ　ドオゼエカ』　ブシガ　ジュウニニン』　ヤリモチ　ゾオリトリ　ソノホカ

ツゴオ　サンジュウニン』

シテ　ソノ　カタガタワ　ドコニ　オイデデ　ゴザイマス』

イヤ』　エドオ　シュつタツスル　トキワ　サンジュウニンデ　アつタガ』

ドオチュウデ　オイオイ　ビョオキオ　イタシ』　シュクジュクニ　ノコシ

オイタ』　ソレデ　イマ　ドオゼエト　ユウノワ　ジョオゲ　アワセテ　タつタ

フタリダ』

オフタリナラ　レンダイデ　シヒャク　ハチジュウモンデ　ゴザイマス』

イヤ　ソレワ　タカイ』　スコシ　マケロ』

オヤカタワ　キュウニ　コトバオ　カエマシタ』

タカケリャ　ヤメテ　サつサト　イクガ　イイ』

コレ』　ブシニ　ムカつテ　ナンタル　ブレエナ　コトバダ』

オマエ　ソレデ　ブシカ』　ソノ　カタナオ　ミルガ　イイ』

フリカエつテ　ミルト』　カワノ　サヤブクロガ　ハシラニ　ツカエテ

クノジナリニ　マガつテ　イマス』

ハハハハ　オオワライダ』　ヤジサン　サア　イコオ>ト』　キタハチニ

サソワレテ　ヤジロオワ　ソコソコニ　ニゲダシマシタ』

〔甲〕スルガノ、又はスルガノといふ人もある。オヤカタ、又は平板式にもいふ。従つて、「ノ」の附く形は、オヤカタノである。ミドモワ、又はミドモワともいふ。カワゴシ（平）ニンソク（平）、又は續けてカワゴシニンソク。スル　トキワ、又は續けてスルトキワ。サつサト、又はサつサト。

〔乙〕『お前の脇差を貸してくれ』の「脇差」を強める。『かうして武士に』の「武士」を強める。

る。『頼むぞ』の終は尻上りの調子。『なに同勢か』の終は尻上りの調子でもよいが、「武士らしい」威厳を附けるには尻下りの調子の方がよいであらう。『お前それで武士か』の終は尻下りの調子でなければならない。これは眞に疑問を尋ねてゐるのでなく詰問してゐる所だからである。

サン』　オハラメ』

百四十二頁

トオトオ　キョオトニ　キマシタ』

シジョオドオリオ　アルイテ　イルト」　オハラメタチガ　シバヤ　スリコギヤ

ツチヤ　ハシゴヤ　ソノホカ　ナンデモ　アタマニ　ノセテ　ウリアルイテ

イマス』　ヤジロオモ　キタハチモ　メズラシソオニ　ナガメテ　イマシタ』

スルト　ヒトリノ　オハラメガ　ヤジロオノ　ソバエ　ヨつテキテ」

百四十三頁

コノ　レンギオ　カつテ　クダサイ>ト　イイマス』　ヤジロオ」

ナンダ　スリコギカ』　ソンナ　モノワ　イラナイヨ』

ナンナリト　カつテ　クダサイ』

ヤジロオワ　ジョオダンハンブンニ

ハシゴナラ　カつテ　ヤロオ』　イクラダ』

ヤスク　シテ　オキマス』　シチヒャクモン　クダサイ』

ヤジロオワ　ドオセ　カウ　キデワ　アリマセンガ」

タカイ　タカイ』　ニヒャクナラ　カつテ　ヤロオ>ト　イイマシタ』

ダンナ　アンマリデス』・ゴヒャクニ　シテ　オキマショオ』

イヤイヤ　ニヒャクデ　ナクテワ　カワナイヨ』

ヨオ　ゴザイマス』　マケテ　オキマショオ』

ヤ　マケルノカ』　ナサケナイ　コトオ　ユウ』

サア　モつテイつテ　クダサイ』

イヤ　オレワ　タビノ　モノダ』　ハシゴオ　モラつテモ　シカタガ　ナイ』

アヤマル　アヤマル』

百四十四頁

シカシ　コオ　ナルト　オンナワ　ナント　イつテモ　キキイレマセン』

トオトオ　ヤジロオワ　ハシゴオ　カワサレテ　シマイマシタ』

コレ　キタハチ』　オマエ　コレオ　カツイデ　クレ』

トンデモナイ』　イつタイ　ナンダつテ　キョオノ　マンナカデ　ハシゴオ

カウノダ』　バカバカシイ』

百四十五頁

シカタガ　ナイ』　サシアイデ　カツゴオ』　オマエモ　ツキアつテ　クレ』

フタリワ　ナガイ　ハシゴオ　カツギナガラ　キョオトノ　マチオ

ケンブツシテ　アルキマワリマシタ』

〔甲〕レンギ、これはわざと東京語でない語を使つたのであるから京都のアクセントに従ひレンギといふのがよい。其の他大原女の言葉は今日の標準語に改めてあるから、東京語の發音及びアクセントの慣習に従ふ。

〔乙〕『とう〳〵京都へ』の「京都」を強める。とう〳〵を強めては良くない。『いらないよ』の終は尻下りの調子。『梯子なら』の「梯子」を強める。『やまけるのか』終も尻下り。『まける』を強め「情ない」調子でいふのがよい。『これ北八、お前これをかついでくれ』は元氣のない聲でいふと面白い。『京の眞中で梯子を』の「梯子」を強める。「京の眞中」を強めては良くない。

ダイ　ニジュウ　ゴ』　ソラノ　タビ』

トオキョオカラ　オオサカエ　ヒコオキデ』　コオ　カンガエル　ダケデモ

百四十六頁

ジツニ　ユカイダ』　コトニ　キョオワ　カゼモ　ナイ　アキビヨリデ
アル』
キナイノ　セキニ　ツクト　チイサイ　トビラガ　ソトカラ　ポント
シメラレル』　ナンノ　コトワ　ナイ　リョカクキト　ユウ　モノワ
ジドオシャオ　ホソナガク　シテ　ソレニ　オオキナ　ツバサオ　ツケタ
モノト　オモエバ　ヨイ』
ミオクリノ　ヒトト　マドゴシニ　カオオ　ミアワセテ　ワラつテ　イル
ウチニ　プロペラガ　モノスゴク　ウナリダシタ』　ゴゼン　クジデ　アル』
ミ(ン)ナガ　テオ　アゲテ　ワカレノ　アイズオ　スル』　イツノマニカ
キタイガ　スベリダシテ　グングン　ソクリョクガ　クワワル』　フリムイテ
ミタガ　ウシロニ　マドガ　ナイノデ　ダレモ　ミエナカつタ』　ヒロイ

百四十七頁

ヒコオジョオガ　ツキテ　マエワ　カワダト　オモつタ　コロ　キタイワ
モオ　クウチュウニ　ウカンデ　イタ』
ホつト　シナガラ　ゲカイオ　ノゾクト』　ウミダ』　フネダ』　タクサンノ
ジンカダ』　ソレニ　シテモ　クウチュウカラ　ミル　シガイワ　ナント　マア
セエゼント』　アザヤカニ　ウツクシイ　モノデ　アロオ』　コレガ
ヨコハマカナト　オモウ　マモ　ナク　モオ　マエニワ　コヤマガ　ツズイテ
イル』　ダンダンバタケノ　ヤサイガ　フルイツキタイ　ホド　アザヤカナ
ミドリオ　ミセル』　ヤマトノ　アイダニ　キイロイ　カワノ
ヨオニ　ミエルノワ　イナダデ　アつタ』　モリ　ジンカ　ドオロ　ハタケ
ソオユウ　モノガ　モケエズノ　ヨオニ　キチント　シテ　イル』　ソノ
アイダオ　ヌつテ　マつスグニ　ハシル　モノワ　ワタクシタチノ　ノつテ

百四十八頁

イル　ヒコオキノ　カゲボオシテ　アつタ』

ヒダリニ　タイヘエヨオガ　シロク　ヒカつテ　ミエル』　ハレテ　イル

ワリアイニ　キョオワ　エンボオガ　キカナイ』　チヘエセンノ　アタリワ

ボつト　カスンデ　イル』　ミギワ　ヤマヤマガ　チカク　ミエル』

イツノマニカ　アオゾラニ　フジガ　ミエダシタ』

マエノ　コマドガ　アイテ　キカンシガ　シヘンオ　サシダシタ』　ゼンボオ

ハコネヤマ>ト　カイテ　アル』　ドオジョオシャガ　ジュンジュンニ

ワタシナガラ　ウナズキアウ』　キナイデワ　ジブンノ　コエサエ

キコエナイ』　ダンワワ　ヒツダンカ　テマネ』　キュウニ　オシニ　ナつタト

ドオヨオデ　アル』　コレカラ　ノチモ　カキツケガ　タビタビ　マワル』―

コオドケエワ　グングン　ノボつテ　イつセン　サンビャク

百四十九頁

ゴジュウメエトルオ　シメシタ』　ソレト　トモニ　アノ　イダイナ　ハコネノ

ヤマヤマガ　カタハシカラ　ガンカニ　ヒレフシハジメタ』　クジ

ニジつブンデ　アつタ』

ヤマト　ユウ　モノオ　クウチュウカラ　ミオロスト　イガイニ　ハゲタ

バショノ　オオイノニ　オドロク　イタダキノ　ガンカクガ　テニ

トレソオニ　ハつキリト　ミエタ　ツギニワ　フカイ　タニガ　ドンゾコニ

オオキナ　クチオ　ヒラク』　ゲカイワ　イマ　オオナミノ　ゴトク　ウネつテ

イルノダ』　ト　ゼンポオニ　ミズウミガ　ミエダシタ』　アシノコデ　アル』

ナント　ユウ　ウツクシイ　コイ　アオサデ　アロオ』　ヤガテ　ミズウミノ

イつカクオ　カスメル　ヨオニ　トオリスギル』　コハンノ　イエ』　ドオロオ

ハシル　ジドオシャ』　スベテガ　ガンダノ　ヨオニ　チイサク　ガングノ

ヨオニ　ウツクシイ‖—‖
ヌマズカラ　イつチョクセンニ　スルガワンノ　ジョオクウオ　ヒコオスル
ユカイサ‖　ナガイ　ミギワガ　マルデ　カンナデ　メンオ　トつタ　ヨオニ
キレエニ　ツズク‖　カイスイワ　エノグオ　トカシタ　ミズダ‖　ヨク
ミルト　カイジョオ　イチメンノ　ナミワ　ウツクシイ　チリメンデ　アリ
テンザイスル　ギョセンワ　ムスウノ　ゴマツブデ　アル‖　コオドケエワ
イつセン　ヒャクメエトルオ　シメシテ　イルガ　フジワ　ヤつパリ
ヨコグモノ　ウエノ　アオゾラニ　クつキリト　ソビエテ　ソノ　スソオ
ナガク　ゲカイニ　ヒイテ　イル‖　フジガワガ　ソソイデ　ソノ
ダクリュウオ　トオク　カイジョオニ　オシダシテ　イルノガ　ミラレル‖
マつサオナ　エノグノ　ミズニ　クリイムオ　ナガシコンダ　ウツクシサダ‖

百五十一頁

ミオノ　マツバラワ　イガイニモ　アつケナイ　モノデ　アつタ‖　アノ
ウツクシイ　タクサンナ　マツモ　ニレツカ　サンレツニ　ナランデ　ハエタ
カワラヨモギトシカ　ミエナイ‖　スベテ　マウエカラ　ミル　ジュモクワ
スコブル　ヒンジャクデ　アル‖—‖
フタタビ　リクニ　イつタ‖　ゲカイワ　イつケン　ハナハダ　ユルユルト
イドオシテ　イルガ　ソレデイテ　スベテノ　モノガ　アつト　ユウ　マニ
スギテ　シマウ‖　シズオカノ　ジョオクウオ　トオつタノモ　ツカノマ
スグニ　アベカワオ　コエテ　マタ　ヤマデ　アル‖
オオイガワオ　シリメニ　カケテ　ワタリ　ソレカラ　シチフンノ
ノチ　テンリュウガワオ　コエ　サラニ　ロつブンノ　ノチ　ハマナコノ
ホつカクオ　カスメル‖　マルデ　ドオチュウスゴロクオ　トンデ　イク

百五十二頁

百五十三頁

キモチダ‖ ソラニワ ダンダン クモガ フエテ クル‖
オカザキオ スギテカラ ヒロイ ヘエヤガ ツズイタ‖ イチボオノ
デンボガ‖ チョオド ホオガンシノ ヨオニ セエゼント クギリオ ミセテ
トオク ヒロガル‖ コオドワ サンビャクメエトルオ クダッテ ゲカイガ
テニ トレソオニ ナッタ‖ トオカイドオノ マツナミキガ ミエル‖
ドオロガ ジュウモンジニ マジワル‖ ジュウジロオ チュウシンニ シテ
ココ カシコニ ソンラクヤ マチガ テンザイスル‖ テツドオガ ミエル‖
デンシャガ ハシル‖ ジドオシャガ トブ‖ ヒトカゲガ ウゴク‖
フタタビ ウミエ デタ‖ ミギテニ チッコオガ アリ キセンガ スウセキ
カカッテ イル‖ ナゴヤダト オモウ トタン‖ プロペラガ トマッテ
アトワ クウチュウカッソオデ アル‖ ダイチガ ミルミル モリアガッテ

百五十四頁

キワ カルク チジョオオ オドリナガラ スベル‖ ジュウジ サンジュウ
ゴフンデ アル‖
ナゴヤワ スッカリ クモッテ イタ‖ キセンガ スウセキ ミエル ダケデ
シガイワ ノゾムベクモ ナイ‖ ダイチオ フミシメテ アルイテ ミル‖
ミミワ マダ ガンガン ナッテ イル‖ ワタクシノ リンセキニ
ノッテイタ グンジンサント ハナシアッテ ミタガ ハッキリト
ツウジナイ‖ ツンボドオシノ ヨオニ ヤタラニ オオゴエオ ハッスル
ダケダ‖
ジュウイチジ マタ キジョオノ ヒトト ナル‖ ナガイ カッソオノ ノチ
リリクスルト ヤガテ ホオコオガ キマッテ ヒダリニ イセワンガ
ハルカニ ツズク‖ ミギテニワ オオキナ カワジリガ イクツ‖

百五十五頁

ヨつカイチオ　スギテ　ヘエヤカラ　シダイニ　サンチニ　ウツル

コオドケエワ　エンリョ　ナク　ノボつテ　マタモ　センメエトルオ

トつバスル　キャつカニワ　スズカサンミャクガ　ウネリハジメタ　トタンニ

キタイガ　ストント　オチル　ワタクシワ　オモワズ　マエノ　イスニ

ツカマつタ　マタ　ストント　オチル　エヤボケつトダナト　オモウ

トナリオ　ミルト　グンジンサンガ　エガオデ　ウナズク　ミギテニ

トオク　ビワコラシイ　モノガ　ミエタ

サンチワ　ナオ　シバラク　ツズイタ　ジュウイチジ　ニジュウ　サンプン

ヒダリニ　ヤヤ　トオク　オオキイ　トシオ　ノゾンダ　グンジンサンワ

チズオ　サシテ　ソレガ　ナラデ　アル　コトオ　シメシテ　クレル

ヤマトヘエヤガ　エノ　ヨオニ　ウツクシク　カスンデ　イタ

百五十七頁

イコマヤマノ　イタダキオ　カスメナガラ　スギルト　マエワ　イチボオノ

ヘエヤダ　デンボノ　アイダニ　イクジョオノ　ドオロガ　タテニ　ヨコニ

ツズク　アオゾラノ　スエニ　スミノ　ヨオナ　クモ　ソレワ　オオサカノ

オビタダシイ　ケムリデ　アつタ

ツイニ　オオサカガ　キタ　イチメンワ　イエノ　ウミデ　アル　コオドガ

グングン　オチテ　マチマチガ　ハつキリ　ミエル　ミゾノ　ヨオナ

ガイロオ　キュウクツソオニ　ジドオシャガ　ハシつテ　イル　ホリガ　アル

タクサンナ　フネダ　イつタイ　ドノヘンダロオ　テンシュカクワト　オモウ

シュンカン　ナガイ　カダンガ　スギタ　テンノオジコオエンデ　アつタ

キワ　シガイオ　ニシエ　ツキヌケテ　トオトオ　ウミエ　デタ　ミナトノ

コオケエガ　ナナメニ　ウキアガつテ　メニ　エエジタ　トキワ　モオ

百五十八頁

ホオコオオ　テンジテ　ウミカラ　ヒコオジョオエ　スベリコム　ヨオニ
クダつタ』　ジュウイチジ　サンジュウ　シチフンデ　アつタ』
ヒロイ　ヒコオジョオニ　オリテ　（ハゴロモオ）　ウシナつタ　テンニョノ
ヨオニ　トボトボト　アルク』　キケバ　グンジンサンワ　キョオ　ゴゴ
フクオカエ　トビ　アスワ　サラニ　タイワンエ　トブノダ　ソオダ』

〔甲〕　ナンノ　コトワ　ナイ、又は續けてナンノコトワ　ナイともいふ。ウカンデ　イタ、
又は續けてウカンデイタ。ジンカ「人家」、又は平板式にもいふ。ダンワ、又は平板式。
オカザキ、又は平板式。エヤポケつト、これが原語（英語 air pocket）のアクセント

百五十九頁

に近い。日本語としてエヤポケつトといふ人もあるだらうが日本語としての慣習はまだ固定しない。カスンデ　イタ、又は續けてカスンデイタ。

〔乙〕　『と、前方に』「と」を輕く言つてその次で切る。『一面は』は「一面に」の意味であらう。此の意味で「一面は」といふのは標準語ではあるまい。『軍人さんが、うらやましく』の間は切らない方がよい。

ダイ　ニジュウ　ワ　ロク』　モクセエノ　ハナ』

ガつコオノ　ミチスガラ　ミツツ　ユク　コノ　イエノ　ニワ』　モクセエワ
コトシモ　サキヌ』
キンイロニ　サキコボレ　エダエダニ　コボレ　ニオイテ』　モクセエノ
ユカシキ　カオリ』

百六十頁

ナツカシキ シノ キミオ ミオクリシ コゾノ イマゴロ コノ ハナノ
サカリ ナリケリ』

アキノ ソラ カモ タカク モクセエワ コトシモ サキテ シノ
キミオ シミジミ オモウ』

〔甲〕 コボレ ニオイテ、又は續けてコボレニオイテといつてもよい。シミジミ、又はシミジミ。

〔乙〕 『道すがら』の次は切らないか、又は切つても極々短く切るのがよい。『もくせいのゆかしきかをり』の「もくせい」は稍弱くいふ方が、他の節と對照して變化を與へることになる。『此の花の盛りなりけり』の「此の花」を稍強めるとよい。『今年も咲きて』の次、稍長く切るのがよい。「師を思ふ」心持を表現するためである。

百六十一頁

ダイ ニジュウ シチ』 タチバナ チュウサ』

テキワ ヤマニ ヨリテ ジンチオ カタメ サカンニ ダンガンオ
ウチイダス』 ワガヘエ コレオ モノトモ セズ テキジン メガケテ
トツゲキスレバ テキワ ツルギノ ハヤシオ モつテ ワレオ ムコオ』
タチバナ チュウサ マつサキニ タチテ テキチュウニ オドリイリ」
タチマチ サンニンオ キリタオス』

テキノ ダンガン アラレノ ゴトシ』 チュウサ スデニ ウシュニ
キズオ ウケタレドモ サシュニ グントオオ フルイテ ブカノ ヘエシオ
ハゲマシ ハゲマシ ツイニ ニつショオキオ サンジョオニ タツ』 トキワ
メエジ サンジュウ シチネン ハチガツ サンジュウ イチニチ アサヒノ

イマダ アガラザル コロ ナリキ』

テキワ コレオ ミテ サンボオヨリ サカンニ タイホオオ ウチカク』

百六十二頁

イカニ ココロワ カタクトモ ミワ テつセキニ アラザレバ ホオガンニ

タオルル ヘエシ カズ シレズ』 テキワ スカサズ サラニ アラテオ

クワエテ セメキタル』 チュウサワ ダイオンニ』

百六十三頁

ヒトタビ コつキオ タテタル コノ コオチ ゼンメツストモ テキノ

テニ ワタスナ』 イつポモ シリゾクナント サケビテ テキオ

ゲキタイスル コト スウド』 チュウサ スデニ ダイ ニダンオ サシュニ

サラニ ダイ サンダンオ フクブニ ウケタレドモ スコシモ ヒルム

イロナク ナオ フンセンオ ツズケタリ』 タチマチ ホオダンノ

イチハヘン ソノ コシニ アタリ チュウサワ ドオト ソノ バニ

タオレタリ』

百六十四頁

カタワラニ アリシ ウチダ グンソオワ イソギ チュウサオ ザンゴオノ

ウチニ タスケ イレテ カイホオス』 タタカイ マスマス ハゲシ』

チュウサ メオ ミハリテ グントオオ ツエニ タチアガラントス』

グンソオ チュウサオ セオヒ ダンガンノ シタオ クグリテ ケワシキ

ガケオ カケクダル』

ホつト ヒトイキ ツク オリカラ トビキタル イチダン マタモ

チュウサノ ムネオ ツラヌキ グンソオノ ムネオモ ツラヌク』 フタリワ

イチドニ ウチタオサレテ キオ ウシナエリ』』

フク アササカゼニ チュウサモ グンソオモ フト ワレニ カエレリ』

グンソオ カタワラニ アリシ フショオヘエト トモニ チュウサオ

百六十五頁

イタワル　オリカラ」テキノ　トツゲキノ　コエ　サカンニ　キコユ』

ジンチワ　フタタビ　テキニ　トリカエサルルニ　アラズヤ』チュウサワ

イエリ』ザンネンナリ』タスウノ　ブカオ　ウシナイテ　センリョオシタル

ジンチオ　トリカエサルルカ>ト』サラニ　カタチオ　タダシテ　イエリ』

キョオワ　ワガ　コオタイシデンカノ　ンマレタマイシ　ヒナリ』コノ

メデタキ　ヒニ　イつシンオ　クンコクニ　ササグルワ　マコトニ

グンジンノ　ホンモオナリ>ト』シズカニ　リョオガンオ　トジツツ

レンタイチョオ　ショオヘエノ　アンピオ　ツギツギニ　タズネ」ホトンド

オノレノ　クツウオ　シラザル　モノノ　ゴトシ』チュウサノ　ゼンシンワ

シダイニ　ヒエヌ』ヒモ　クレントスル　コロ」グントオワ　アルカ>ノ

イチゴオ　サイゴト　シテ」ツイニ　イキ　タエタリ』』

百六十六頁

タチバナ　チュウサワ　ヘエゼエ　ココロザシ　カタク　ユウキニ　ミチタル

グンジンニシテ」ウエオ　オモイ　ブカオ　アワレム　ココロ　フカカリキ』

コノ　ヘエゼエノ　オコナイ　アリテ　コノ　ソオレツナル　シオ　トグ』

チュウサガ　タスウノ　センシャチュウ　トクニ　グンシント

アガメラルルモ　ウベナリト　ユウベシ』

〔甲〕『右手、左手』ミギテ、ヒダリテといふ時は共に平板式である。ウベナリト、又はウベナリト。

〔乙〕此の課は殆どすべて強い聲を以て讀むべきである。『時は明治三十七年』云々の一文は稍ゆつくりいふ。『一歩も』を特に強める。『氣を失へり』の次、休止を置く。『取返さるゝか』を強めるとよい。『今日は我が』云々の言葉は切れ目を多く附け、とぎれ〳〵に言ふと臨終に近い中佐の心持をよく表すであらう。『静かに兩眼を』以下此の文の終まで、ゆつくりいふ。『中佐の全身は』より『息絶えたり』まで、聲を弱く、ゆつくりい

ふ。たゞ『軍刀はあるか』だけは稍大きくいふ。

百六十七頁

ダイ ニジュウ ハチ』 コクゴノ △チカラ』

ネンネン コロリヨ』 ボオヤワ ヨイ コダ ネンネシナ』』

ダレデモ』 オサナイ トキ』 ハハヤ ソボニ ダカレテ』 コオシタ △ウタオ

△キキナガラ ココロヨイ ユメジニ ハイつタ コトオ オモイダスデ

アロオ』 コノ ヤサシイ ウタニ ウタワレテ イル コトバコソ』 ワガ

ナツカシイ コクゴデ アル』』

キミガヨワ チヨニ ヤチヨニ サザレイシノ イワオト ナリテ コケノ

ムスマデ』

コノ コつカオ ホオショオスル トキ』 ワレワレ ニつポンジンワ オモワズ

百六十八頁

エリオ △タダシテ』 サカエマス ワガ △コオシツノ バンザイオ ココロカラ

イノリ タテマツル』 コノ コつカニ ウタワレテ イル コトバモ マタ

ワガ トオトイ コクゴニ ホカナラナイ』』

ワレワレガ マイニチ ハナシタリ キイタリ ヨンダリ カイタリ スル

コトバガ ワレワレノ △コクゴデ アル』 ワレワレワ イチニチタリトモ

コクゴノ △チカラオ カリズニ セエカツスル ヒワ ナイ』 ワレワレワ

コクゴニ ヨつテ』 ハナシタリ カンガエタリ モノゴトオ マナンダリ

シテ △ニつポンジント ナルノデ アル』 コクゴソワ マコトニ

ワレワレオ ソダテ ワレワレオ オシエテ クレル ダイオンジンナノデ

アル』』

コノ ヨオニ タイセツナ コクゴデ アルノニ』 トモ スレバ コクゴノ

百六十九頁

オンオ　ワキマエズ　ナカニワ　コクゴト　ユウ　コトサエモ　カンガエナイ
ヒトガ　アル　シカシ　ヒトタビ　ガイコクノ　チオ　フンデ　コトバノ
ツウジナイ　トコロエ　イクト　ダレデモ　コクゴノ　アリガタサオ
シミジミト　カンズル　コオ　ユウ　トコロデ　タマタマ　ナツカシイ
ニつポンゴオ　キクト　マルデ　ジゴクデ　ホトケニ　アつタ　ココチガ　シ
アイコクノ　ココロガ　イズミノ　ヨオニ　ワキオコルノオ　カンズルノデ
アル　アメリカ　ガつシュウコクヤ　ブラジルトオニ　スンデ　イル
ニつポンジンワ　ニつポンゴガつコオオ　タテテ　ジブンノ　コドモタチニ
コクゴオ　オシエテ　イル　ニつポンジンワ　ニつポンゴニ　ヨつテ
キョオイク　サレナケレバ　ナラナイカラデ　アル
ワガクニワ　カミヨ　コノカタ　バンセエ　イつケエノ　テンノオオ

百七十頁

イタダキ　セカイニ　タグイ　ナキ　コクタイオ　ナシテ　コンニチニ
ススンデ　キタノデ　アルガ　ワガ　コクゴモ　マタ　コクショ　イライ
ケエゾクシテ　ゲンザイニ　オヨンデ　イル　ダカラ　ワガ　コクゴニワ
ソセン　イライノ　カンジョオ　セエシンガ　トケコンデ　オリ　ソオシテ
ソレガ　マタ　コンニチノ　ワレワレオ　ムスビツケテ　コクミント　シテ
イつシン　イつタイノ　ヨオニ　ナラシメテ　イルノデ　アル　モシ
コクゴノ　チカラニ　ヨラナカつタラ　ワレワレノ　ココロワ　ドンナニ
バラバラニ　ナル　コトデ　アロオ　シテミルト　イつタン　カンキュウ
アル　トキ　クニオ　アゲテ　コクナンニ　オモムクノモ　コオコクノ
ヨロコビニ　クニオ　アゲテ　バンザイオ　トナエルノモ　ヒトツニワ
コクゴノ　チカラガ　アズカつテ　イルト　イワナケレバ　ナラナイ

コクゴワ　コオユウ　フウニ　コつカ　コクミント　ハナス　コトノ
デキナイ　モノデ　アル』コクゴオ　ワスレタ　コクミンワ　コクミンデ
ナイトサエ　イワレテ　イル』』
コクゴオ　トオトベ』コクゴオ　アイセヨ』コクゴコソワ　コクミンノ
タマシイノ　ヤドル　トコロデ　アル』

百七十一頁

〔甲〕

『ねんねんころりよおころりよ』アクセントとしては不定である。ネンネン　コロリヨ　オコロリヨの型の様に言つてよい。『ねんねしな』日常の子供の言葉「ねんね」のアクセント、ネンネを採る。子守歌の旋律に従へばネンネシナの様になる。『君が代』キミガといふ一語として平板式、ヨワ一語としては此の型である。續けてはキミガヨワと平板式にいふことがあり、又は旋律に従つてキミガヨワといふこともある。ブラジル日本語としては平板式にいふのが慣用語となつてゐる。原語（ポルトガル語 Brazil）に近くいへばブラジル、又この語を英語流にいへばブラジルが近い。従つて「…ナ

〔乙〕

ド」の附く形はブラジルナドとなる。『一旦』イつタン、又はイつタン。始めの子守歌は歌つてもよいが、もし普通の言葉でいふ時は、柔かい調子でゆつくりといふのがよい。『聞きながら、快い』の間は切らない方がよい。『君が代』の歌詞は前の子守歌と對照して力強くいふと良い。『國語によつて〳〵話したり』の間は切る方がよい。『育て』『教へて』を稍強めるとよい。『國民でない』の「ない」を強める。

昭和十二年六月十四日印刷
昭和十二年六月十八日發行

小學國語讀本朗讀法（卷九）【定價一圓五十錢】

著者　神保格　東京市麹町區下六番町四十八番地
發行者　岡本正一　東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地
印刷者　山本禎男　東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地
印刷所　株式會社宗文社印刷所

發兌　岡書院　厚生閣　東京市麹町區下六番町四十八番地
振替東京五九六〇〇番
電話九段三二一八番

小學國語讀本朗讀法

【全十二冊】

〈卷一〉價〇・八〇
〈卷二〉價〇・九〇
〈卷三〉價一・一〇
〈卷四〉價一・一〇
〈卷五〉價一・一〇
〈卷六〉價一・二〇
〈卷七〉價一・二〇
〈卷八〉價一・三〇
〈卷九〉價一・五〇
〈卷十〉價未定
〈卷十一〉價未定
〈卷十二〉價未定

〈四一冊各料送〉

・☆

アクセント決定版として聲價全くさだまる！

東京文理大教授
神保格著

東京文理科大學教授
神保格
常深千里 共著

★十版出來★

三六判机上・携帶兼用・アンチック活字使用
八ポ二段組特別符號新鑄造・特漉上質使用・
印刷鮮明・製本監牢總革函入解說附五五〇頁

國語發音 アクセント辭典

定價二圓五十錢
送料十四錢

日用語三萬！

★國語最初の標準音辭典
日本語アクセントの確立！

★生きた口語の最初の辭典
國語の系統的全的把握！

★解說は發音最高の指導書
アクセント理論の全鳥瞰！

★世界最高の文化を持ち、一等國として恥じぬ尨大な國語字典を持つわれわれ日本人が、未だにその言葉に正しい標準音を持たぬといふことは實に驚くべく、且動かすべからざる事實である。文化の程度が、その國の言葉の整備如何によつて決せられること多きを考へる時、この缺陷は日本の精神文化高揚の立場から言つて、まことに忽せに出來ない重大問題である。著者は嘗て文部省の委囑を受け、このことの爲に全面的研究を續けて來たわが發音學の第一人者。見よ！ 教育者不可缺の、標準發音による日用語の全把握！

【內容概說】

〈1〉 本辭典に收載されてゐる語彙は下記の範圍に亘つてゐる。すなはち**日用語の全部を網羅**してゐるのである。

a. 中流階級の純粹の東京人が日常最も多く使つてゐるもの。

b. 舊時代の風俗文物に關するもので現在使つてゐるもの。

c. 尋常**小學國語讀本**及び尋常小學讀本の第一卷より第十二卷に至る**語彙の全部**，尋常科の他の教科書中の主なもの。

〈2〉 本辭典は，それらの**言葉の純粹發音，即ち音韻とアクセント**を多年の苦心研究により總合し歸納した，標準辭典である。

〈3〉 日常使用の言葉の一切を包容してゐる點で本辭典はまた「**生きた國語の辭典**」として最初のものである。

〈4〉 卷頭六十數頁に及ぶ懇切叮寧を極めた『**解說**』は，**それ自身平易なるアクセントの指導理論である。**〈以下略〉

☆國語教育

國語教育學　東京高師講師　丸山林平著　菊判背革裝　函入　價四・二〇　送料・二二

辨證法的國語學習　齋藤榮治著　四六判洋布裝　函入　價二・三〇　送料・一四

國語科要旨の批判と解說　東京高師前調導　宮川菊芳著　四六判洋布裝　函入　價一・八〇　送料・一四

國語教育診斷　武藤要著　四六判洋布裝　函入　價二・八〇　送料・一八

國語の本質とその教育　廣島高師調導　佐藤德市著　四六判布裝　函入　價二・六〇　送料・一八

國語教材內觀の方法　齋藤榮治著　四六判洋布裝　函入　價二・六〇　送料・一四

小學國語讀本の指導とその理論　尋一　前期用　東京高師前調導　千葉春雄編　菊判布裝　美裝　函入　價〇・六〇　送料・一四

小學國語讀本の指導とその理論　尋一　後期用　東京高師前調導　千葉春雄編　菊判　美裝　函入　價〇・八〇　送料・一四

國語教育の修身的考察　東京高師前調導　河野通賴著　四六判布裝　函入　價二・五〇　送料・一四

最近の文學・文章研究と國語教育　東京高師前調導　千葉春雄編　菊判洋布裝　函入　價二・五〇　送料・一八

最近の心理學と國語教育の問題　東京高師前調導　千葉春雄編　菊判洋布裝　函入　價二・七〇　送料・一八

國語教育の科學的研究　東京高師前調導　千葉春雄編　菊判洋布裝　函入　價二・五〇　送料・一八

國語教育の方法學的研究　東京高師前調導　千葉春雄編　菊判洋布裝　函入　價二・五〇　送料・一八

日本精神の發揚と國語教育　東京高師前調導　千葉春雄編　菊判布裝　函入　價二・五〇　送料・一八

國語教育中心　兒童讀物の系統的研究　東京高師前調導　千葉春雄編　四六判布裝　函入　價一・八〇　送料・一四

國語讀本を戲曲化せる　高等讀本を戲曲化せる　兒童劇脚本　東京高師前調導　宮川菊芳　三浦成作共著　四六判美裝　函入　價三・〇〇　送料・一四

新讀本を戲曲化せる　尋一の　兒童劇脚本　東京高師前調導　三浦成作共著　四六判美裝　函入　價二・五〇　送料・一四

新讀本を戲曲化せる　尋二の　兒童劇　三浦成作著　四六判美裝　函入　價一・五〇　送料・一四

辨證法的解明　讀方教育の新機構　廣島高師調導　佐藤德市著　菊判洋布裝　函入　價二・六〇　送料・一八

形象の讀み方教育　廣島高師調導　佐藤德市著　菊判洋布裝　函入　價二・九〇　送料・一八

辨證法的讀方教育　森本安市著　四六判洋布裝　函入　價一・八〇　送料・一四

生命の讀方教育　廣島高師調導　佐藤德市著　菊判布裝　函入　價三・四〇　送料・一八

辨證的日本精神への讀方教育　吉田義則著　四六判洋布裝　函入　價一・八〇　送料・一

態度馴致の讀方教育　東京高師前調導　宮川菊芳著　四六判布裝　函入　價二・六〇　送料・一四

讀み方教育要說　東京高師前調導　千葉春雄著　菊判洋布裝　函入　價四・八〇　送料・一八

讀方教育の鑑賞　東京高師前調導　宮川菊芳著　四六判美裝　函入　價二〇〇　送料・一四

讀方教育問答	東京高師前調導 宮川菊芳著	四六判布裝函入	價二・〇〇 送料・一四
實踐解明の讀み方教育	東京女高師調導 德田進著	菊判洋布裝函入	價四・五〇 送料・二二
組織的實踐の讀み方教育	谷口徹美著	菊判洋布裝函入	價二・三〇 送料・一四
實力養成の讀方指導	東京高師前調導 千葉春雄編	四六判布裝函入	價一・八〇 送料・一四
讀方科各學年指導主眼點の研究	東京高師前調導 千葉春雄編	四六判布裝函入	價一・八〇 送料・一四
讀方科教材研究の仕方	東京高師前調導 千葉春雄編	四六判布裝函入	價一・八〇 送料・一四
讀方科に於ける書取の研究	東京高師前調導 千葉春雄編	四六判布裝函入	價一・八〇 送料・一四
讀方科學習 使用に關する研究	東京高師前調導 千葉春雄編	四六判布裝函入	價一・八〇 送料・一四
讀方科に於ける板書の研究	東京高師前調導 千葉春雄編	四六判布裝函入	價一・八〇 送料・一四
讀方科各學年系統的考査の研究	東京高師前調導 千葉春雄編	四六判布裝函入	價一・八〇 送料・一四
最近思潮 讀方教育實踐の進步	厚生閣編輯部編	菊判洋布裝函入	價二・五〇 送料・一四
讀本朗讀の實踐的研究	東京高師前調導 千葉春雄編	四六判布裝函入	價一・八〇 送料・一四
國語學習 アクセント辭典	東京文理大教授 神保格 常深千里共著	三六判總革裝函入	價二・五〇 送料・一四
讀方教育の全新思潮	松田友吉著	四六判洋布裝函入	價二・二〇 送料・一四